創立二十周年記念合同機関誌

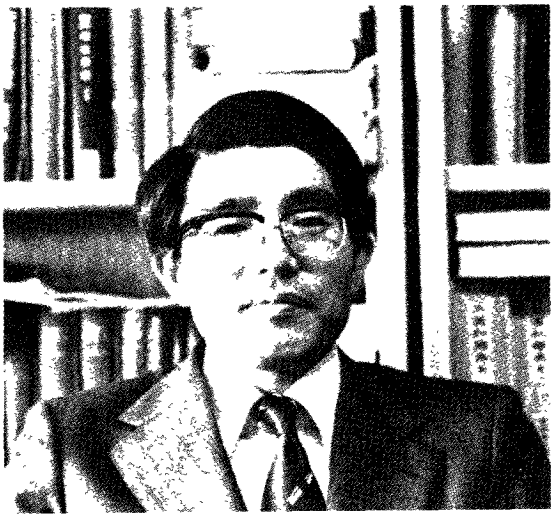
第十号書心・第二十一号荒鷲

書心

荒鷲

福岡大学文化部会書道部

講師　赤木石掃



部長　小西高弘

書心会副会長　安河内克行

書心会会長　柴田一夫

福岡大学校歌

筑紫野は
玄海の汐さいはるか
背振ねを指さすところ
うつくしき我等が母校
われらが理想

道こそはけわしかれ
人らしき人にあるべく
輝ける明日を望みて
若き日の今日を学ばん

信心

石增之

巻頭詩

人間は
青春の力を
その生涯に
ただ一度しか持つことのできない。

それは、
智力や
精神力や
教養の力ではなくて
二度くり返されることのできない
爆発的な力である。

トルストイ

目次

巻頭詩……1
目次……5
序……7
特別寄稿欄
書道部創立二十周年に寄せて……学生部長　林賢市……7
混沌……書道部長　小西高弘……8
歩み……講師　赤木石掃……9
書道部20周年を顧みて……書心会会長　柴田一夫　三十六年度卒……10
人生の宝の山としての書道部……前書道部部長　古田龍夫……10
書道部に望むこと……幹事長　元田直邦……11
後輩へいずれ書心会に入会される書道部の皆さん……書心会副会長　安河内克行　三十九年度卒……12
「是々非々で」……書心会評議委員長　平井晴彦　四十三年度卒……13
無題……書心会副評議委員長　遠藤信廣　四十七年度卒……13
後輩への提言……書心会副評議委員長　山村昌次　五十一年度卒……14
一人の部屋……高倉潔　五十三年度卒……14
自由投稿欄
チャレンジ……経済学部一年　中村純一郎……15
出逢い……経済学部四年　松永義城……15
告白……薬学部二年　天野仁子……16
今思うこと……人文学部三年　三小田佳子……16
心から涙を枯らす時……経済学部四年　原田明……17
サークル活動……理学部三年　十代田雄治郎……18
書道部に入って……法学部一年　簑原千枝……19
私の生き方……人文学部二年　渡辺泰子……19
芸は道によって賢し……経済学部一年　小田部二三典……20
二十二度目の春……工学部四年　島村友博……20

希望は、うまい朝飯だが、まずい晩飯でもある。

大きな心を持って……理学部二年　松藤美津子……36
一から出直せ……経済学部一年　萩田広文……37
自己をみつめて……人文学部二年　手島玲子……37
書道と私……工学部三年　佐藤雅秋……38
情熱……商学部四年　吉冨りえ子……38
大学生活に入って……工学部一年　山城邦敬……39
書道部に入って……工学部二年　石原透……39
視野を広めよ……経済学部三年　大家一之……40
今日から……法学部二年　崎坂真弓……41
大学生になって……法学部一年　川嶋ゆかり……41
道草……法学部四年　上田信一朗……42
個性……法学部二年　城戸信比古……43
切に思う事……経済学部三年　浦泰介……43
振り返りながら……商学部四年　扇寿美子……44
は……人文学部二年　野村敬子……44
る……法学部一年　柴田直人……45
この一歩……法学部四年　久保山豪……46
六十の手習い……法学部一年　鷲崎ゆみ子……46
書道部に入って……商学部三年　鶴岡英子……47
今思うこと……経済学部一年　坪矢一義……48
大学とは……薬学部三年　藤原弘美……48
無題……法学部一年　梅崎孝夫……49
学生生活について……法学部四年　高橋峰生……49
人が一杯、自分一人……経済学部二年　濱田清治……50
青春

すべての偉人、な人には謙虚である。

一年経って……人文学部二年　児玉富美……21
チームワーク……経済学部三年　酒井昌弘……22
大学生として……商学部一年　二村暁美……22
十代最後の春に思う事……工学部二年　横山佳代子……23
大学生活にかける……経済学部一年　江里口吉光……23
四年め……商学部四年　原千尋……24
小論文ー課外活動（サークル活動）……商学部四年　桑原淳一……25
追想……商学部二年　丸田俊和……27
私が今、一番関心のある事……商学部三年　原口豊子……27
書道部に入部して……法学部一年　平田経子……28
僕と書道部……商学部二年　桑波田景成……28
ひとがら……商学部四年　田中孝路……29
我歩む道……商学部一年　高橋福代……30
漲る精神……商学部三年　成田睦子……30
今思うこと……法学部二年　竹本功憲……31
大学生になって……工学部一年　西口公恵……31
入部一週間の今の気持……工学部二年　佐藤達也……32
私の黄山谷観……経済学部三年　重松裕人……32
志も新たに……理学部四年　郡桂子……33
書道部に入部して……工学部二年　覚文博……33
大学生活に思うこと……商学部一年　高杉素子……34
今思うこと……人文学部二年　和田直子……34
夜更けのティータイム……経済学部四年　福田美由紀……35
プライド……法学部三年　鶴田定司……36

できもしないことを、えらぶな、ただ約束を守ることを重んぜよ。

大きな心を持って……理学部二年　松藤美津子……36
一から出直せ……経済学部一年　萩田広文……37
自己をみつめて……人文学部二年　手島玲子……37
書道と私……工学部三年　佐藤雅秋……38
情熱……商学部四年　吉富りえ子……38
大学生活に入って……工学部一年　山城邦敬……39
書道部に入って……工学部二年　石原透……39
視野を広めよ……経済学部三年　大家一之……40
今日から……法学部二年　崎坂真弓……41
大学生になって……法学部一年　川嶋ゆかり……41
道草……法学部四年　上田信一朗……42
個性……法学部二年　城戸信比古……43
切に思う事……経済学部三年　浦泰介……43
振り返りながら……商学部四年　扇寿美子……44
は……人文学部二年　野村敬子……44
る……法学部一年　柴田直人……45
この一歩……法学部四年　久保山豪……46
六十の手習い……法学部一年　鷲崎ゆみ子……46
書道部に入って……商学部三年　鶴岡英子……47
今思うこと……経済学部一年　坪矢一義……48
大学とは……薬学部三年　藤原弘美……48
無題……法学部一年　梅崎孝夫……49
学生生活について……法学部四年　高橋峰生……49
人が一杯、自分一人……経済学部二年　濱田清治……50
青春……

すべての偉人、な人には謙虚である。

自己主張……経済学部四年　桜井　典……50
一年経て……経済学部二年　桃島文子……51
大学生……商学部一年　松山理恵……52
振り返りそして……法学部四年　横山久子……52
一年間……工学部二年　床嶋俊一……53
俺の油山…完結編……工学部四年　森田健二……53
今思うに……工学部三年　中村和美……54
小さなメッセージ……商学部四年　八谷俊彦……55
期待する四年後の自分……商学部一年　志岐直樹……55
人と接する時に……薬学部二年　佐藤朋子……56
徒然なるままに……法学部四年　村瀬和美……56
思いやり……法学部三年　松尾幹雄……56
「大学生活について」……経済学部四年　明神唯司……57
部員の一言……58
書道研究〈王鐸・何紹基・蘭亭序〉……65
中国書道史年表……69
第20代年間行事……77
書道部歴史……79
福大書道部推薦の店……81
福岡大学書心会規約……97
福岡大学書道部卒業生名簿……99
福岡大学学術文化部会書道部規約……113
昭和五十五年度・福岡大学書道部役員名簿……116
編集後記……117

熱中する心がなければ進歩はあり得ない。

序

福岡大学書道部の機関誌『書心・荒鷲』が、創立二十周年記念号として、ここに発刊できますことは、誠に慶びにたえません。

創立二十周年を迎えた我が部は、伝統的にみても、素晴らしいサークルに成っております。今後の発展を望み、原点を忘れることなく、これからの活動に、励みたいものです。『道こそはけわしかれ、人らしき人にあるべく・・・』と校歌にも歌われていますが、書道を志す者にとって、その限界はなく、日々の精進と情熱を忘れず、学生らしい自主的で創造的な活動を、より深く追求し、一歩一歩、堅実に歩んで行きたいと思います。

先輩諸兄、関係諸先生方の御協力を頂き、この機関誌を通じて、部員一同、活動の糧として、より一層前進して行く所存でございます。

第二十代幹事　十代田　雄治郎

苦しみを恐れる者は、その恐怖だけですでに苦しんでいる。

挨拶

福岡大学長　伊東正則

学友会書道部機関誌『荒鷲』の発刊にあたり、あいさつ申しあげます。書道部は創立二十周年を迎えます。一言に二十年と言いますが、同部がこれまでに成長した陰には、諸先輩の言い尽くせない努力があったものと思います。

書の極意が何であるか、今さらここで述べるまでもありませんが、文明の根源である文字を芸術という分野に確立させ、人間の道標になし得たことは、東洋人の優れた智恵であると思います。

ところで、現代の学生諸君の行動を見ますと、その内容は多種にわたり、なかなか一つのことに没頭することが少ないようです。つまり一つの高い目標に向けて時間をかけ、じっくりやり遂げて行こうとすることが欠けて来ているのではないでしょうか。その理由は様々に考えられますが、己れが定めたテーマに向ってその奥儀を極めんと飽く無き努力を積み、あるいはその極意に触れんと日々修練に励む、その過程こそがここに言う学友会活動の意義であり、目標であります。その結果として必然的に人間性、あるいは人格の形成がなされるのであります。

そのような中で、書道部はその属する学術文化部会の中心的サークルとして、その目的を遺憾なく果して来ております。この伝統と実績を踏まえ、今後ますます充実されたものに発展しますよう祈念しまして私のあいさつと致します。

たいていの者は、自分でも思いがけない程すばらしい勇気をもつている。

書道部創立二十周年に寄せて

学生部長　林　賢市

このたび福岡大学書道部では、創立二十周年を迎え、これを記念して同部及びＯＢ会機関誌の合併号、「書心、荒鷲」がここに刊行されることになりました。まことに同慶に存ずるところです。

さて福岡大学三十五年史をひもときますと、「書道部は昭和三十四年六月、新海蘇石君が発起人となり……」とあり、先ず書道、ペン習字の同好会として発足し、翌年十一月、部に昇格しています。三十六年に第一回西日本高等学校揮毫大会を開催、また福岡学生書道連盟をつくりあげたと記してあります。

この頃は福岡大学発展の基礎固めの時期であったと思われます。三十一年には福岡商科大学から福岡大学へ発展し、この年現在の本館の竣工をみています。以後三十五年迄に、一、二号館の竣工、薬学部の新設、ヒマラヤ探査隊の派遣など、めざましい発展をとげ、学術文化部会にも既に二十余の部があり、今日の基礎をみることが出来ます。

その後、書道部は本学及び学友会の歩みと共に発展して来ました。最近十年間の活躍をみても、県展、市展、九州美術協会展等に数多く出品し、入選五十七名、この中特別賞九名という優れた成績を収めています。創立当初からの西日本高等学校揮毫大会、福岡学生書道連盟展は、今日なお、多くの参加校、同好の士の支持のもとに益々盛大に続けられており、これは、本学書道部に対する社会的評価の高まりを物語るものに他なりません。

書は人なりといいます。時に禅の高僧の書などに接しますと、雄渾にして闊達自在、それでいて微動だにせぬ静寂に根づいており、まことに人間存在の深奥を垣間みた感があります。書の道は無限です。部員諸君が益々精進せられ、書の道を通して人間形成に努められると共に、書道部が永遠に発展することを念じてやまない次第です。

混　沌

書道部長　小西高弘

書道部が二十周年を迎えた。おめでとう。益々立派な部として成長してほしいと願わずにはいられない。だが、二十年もたつと、いろいろ「アカ」が溜まるものである。「あか」はいい意味では伝統である。誇りでもある。

しかし、学生は先輩達が永年にわたって築いてきた土台にあぐらをかいてばかりはおれないことを明記してほしい。混沌とした時代に光明をなげかける位いの積極性をもって自己を創造されんことを希望する。ご健斗を祈る次第である。

書道部は柴田会長（ＯＢ書心会）はじめすぐれた先輩を世に輩出し今日にいたっており、喜びにたえない。小生も諸先輩の中でたまたま原兄弟や荒尾君のような方々との知遇を得た。荒尾君はまだ若いが「我が道は自分で拓く」というたくましい御仁で、今後の成長が期待される書道部先輩の一人であり、書道部の誇りであると思う。

信念を持たない限り、人に信念を与えることはできない。

先日、荒尾君が生まれて始めての「個展」を東美・小川氏のご好意で開かれていると承賜った。喜ばしいかぎりである。小生、はげましのつもりで「個展」を見に行ってきましたが、彼のどこにあのような書や絵かでてくるのか考えさせられました。

「羽輪意」とはハワイの意だそうで、常識の世界を克服されんとする一面をのぞき見したような気がした。混沌とした現代に明日を読みとろうとする青年の心が眼が耳が口がある思いであった。

書道部を通じて仲間となった学生諸君が、個性の尊重と個性の確立に邁進し、さらに書道部の発展に寄与されんことを祈りながら筆をおく。

歩み

講師　赤木石掃

わが書道部の歩いて来た道を振り返って反省し、更に前途の方向をさぐり、一層立派な書道部にする為の「二十周年記念行事」に遭遇出来たことに深い感激を覚えます。私は、この二十年を大きく三つに分けて、皆さんの参考にしたいと思います。

一、県展時代

つまり、部の存在を明らかにし、福大書道の産声を校内外に披ろうした時代、片や、成績の上った勢いをかりて部費を少しでも多くいただくことが部の確立に急務であった時代、といえましょう。紙を買うお金もない、それでも部の為なら借金してでも県展に出して部の名声を上げよう、という時代でした。おかげで、特選も佳作も入選も充分な程、いただいたものです。そして、福大書道部の名を校内外に轟ろかせ、自分では、借金を背負ってまで部の為に尽力してくれた先輩がいたことを銘記していただきたいと思うのです。

二、内部充実の時代

ところが、部のあり方について苦労した時代がやってきました。吾々書道部の中で何を学ぶのか？その為に部の日常生活は如何にあるべきか。書道部に入って、有意義な大学生活を送ることが出来たとあとで喜ぶことの出来る部は、如何にあるべきか？字を書くべきか？否、字よりも人間相互の交流が先か？とか、真剣に悩んだものです。今から考えれば幼稚なことと思われるかも知れませんが、このようにして、現在の部の伝統が出来たことを、先輩に感謝せねばならないと思います。又、言葉をかえれば、如何にすれば一年生に対して、よき先輩たりうるだろうか？と言うことを悩み、部員の人間向上の道を確立しようとした時代です。只今の書道部は、いい部でしょうか？

三、勉強方法の確立の時代

さて、部としての社会的意義が明らかになった現在、部に於ける勉強の実績、つまり書道の実技の方向はどうなっているか、県展時代には作風の強さを世に問い、内部充実の時代にあり方がはっきりと樹立されて行ったが、字そのものは、どうなっていくべきか、ということを悩んだ時代です。悩んだ時代と言うより、悩みつつ築いていった時代が現在だと言うことです。大学の書道部は、どのようにして勉強していくのか？日展の審査員の作風だけの勉強では、大学と言う公的存在のなす勉強方法とは言えない。その根本を古典に求める、と言う正しい道を歩くこと

が大切です。現在は、一年生の楷書からはじまり、色々の行書や作品側を古典に求めることが、はっきりしてきた立派な時代となったと思います。

これから先、まだまだ開拓していかねばならないことが沢山あります。例をあげるときりのないことですが、現役の諸君が、先輩の切り開いたこの書道部をよりよい部にしていく責任を感じつつ、更に先輩との大きなきづなを育てていく努力を、この二十周年に当って、再確認する機会を得たことを幸せに思う次第です。

諸先輩の御発展と御健康を祈りつつ、現役の諸君の御健斗をお願いする次第です。

書道部20周年を顧みて

昭和三十六年度卒
書心会会長　柴田一夫

今年福岡大学学術文化部会書道部が発足して20周年を迎えることができましたが、私の脳裏には、20年も過ぎ去ったとは思えず、書道部に在籍した当時が、昨日のように楽しかったこと、困った事などが次々と思い出されてきます。

書道部の種が蒔かれたのが、昭和34年、当時法学部3年新海蘇石氏が発起人となり、原通幸君、諸隈郁智君、三浦勝君、松田詔年君（故人）と私によって同好会が発足したのでありました。同好会創立当時は、書技面は目を覆うばかりで年会費は三千円で船出したものです。

そうした中で、翌年に諸隈君が西部毎日展に入選、第一回西日本高等学校揮毫大会の開催、続いて、安河内君、野田君の県展入選と着実に業績をつんでいきました。今、思い起こせば、今日の書道部の基礎を築いていただいたのは、原通幸君が学文会の常任理事となり、書道部の為に尽力してくれたこと、赤木石掃先生が講師として書技向上に努力していただいたことは、書道部の各展覧会入選及びいろんな実績を見れば、誰もが認めるところであります。又、学校当局と書道部の橋渡し、我々の良き相談相手となり、良き親父になっていただいた古田龍夫先生を思い出さずにはいられません。

20周年を迎えて書道部もやっと成人に達したことになります。この日を迎えるまでの学校当局、および関係の皆様方の深いご理解とあたたかい心には、ただ感謝するばかりです。ご恩に答えるため、私たちＯＢは勿論のこと、部員も書道部の伝統をけがさないようにお互いに協力してそれぞれの立場で最善の努力をいたしたいと存じます。

終りにあたり、ＯＢ会（書心会）、書道部一同本日のこの感激をあらたにこれから後も、これまで以上にがんばっていきたいと思っております。創立20周年という歳月は、決して無駄に過ぎたわけではございません。それは将来に向ってもさらに充実した実績を約束するものです。今後とも、何卒御協力、御指導のほどお願い申し上げます。

忍耐は、どんな悩みにも利く名薬である。

人生の宝の山としての書道部

前書道部部長　古田龍夫

今日の本学書道部の発展には前書道部長の私として目をみはるものがある。それについては、まず、赤木石掃先生に心をこめて感謝の意を表したい。先生は書道部の発足当初から一貫して献身的に指導の労をとられ、先生の書道の大家としての内に蔵せられる深いものが部員の書道に対する情熱をかりたてたのである。

次は、先輩の部員諸氏の真面目さと協力一致の努力に敬意を表わしたい。私は、永い大学教授の生活で各種の部の部長を勤めてきたが、本当に書道部の部員諸氏は真面目であった。だからこそ、書道部は大学当局から惜しみない援助を受けたのである。また、西日本高等学校揮毫大会にしても、当初はその開催には色々な困難があった。例えば会場の獲得についても、当初は体育会や文化会の屋内行事の施設としては学而会館しかなく、ことに、秋の行事の時期は各部の使用申し込みが殺到していたのである。それが今日の大会の隆盛を貢し得たのは、先輩の部員諸氏の協力一致の努力の結晶である。私は、部員諸君が小西部長の下に今後この伝統を守って部の発展に努力されんことを熱望して止まない。

ところで、私は一昨年の四月に七〇才の停年を迎えたが、永い人生の間には、遊星を共にした人や職場で一緒に働いた人は沢山いる。しかし、今日まで、生きがいを与え、また仕事の真の支えとなってくれた人は、むしろ、多感な青年時代に、たとえ一杯の酒やコーヒーを共にしなくても、あるいは職場を共にしなくても、美しいことを語らい、美しいことを共にし、純な気持ちで交ったことのある人達である。してみれば、書道部員の諸君は、まさに人生の宝の山にあるといえよう。書道という純にして美しいものを共にしているからである。書道部における交りを大切に大切にされんことを切望する次第である。

書道部に望むこと

福岡大学学術文化部会常任幹事会
幹事長　元田直邦

書道部が創立二十周年記念号として伝統ある機関誌「書心、荒鶯」を発刊されますことは、学術文化部会一同の大きな慶びでございます。書道部の輝かしい歴史を築かれましたOB諸氏、並びに継承当事者として御活躍なさる現役諸氏の合同機関誌に、書道部の発展の足跡を見るような気が致します。

私は就任以来、これまで様々な角度から書道部を見、接触して参りました。ある時は学文会室で役員諸氏と話し、ある時は日本間道場の練習を見学し、そして又ある時は西日本高等学校揮毫大会々場で書心会の方とお話出来る機会も得ました。

ここで私が書道部について感じることを何点か述べさせて頂きたいと思います。まず第一に、部室のドアの「挨拶励行」という大きな紙に象徴されますように、礼儀正しい、けじめのついたサークルであるということです。これは書道部の活動がその特殊性上、精神面を重んじる文化活動であるということ、又、各代のOBの方々が年々引き継いでこられたものが、今なお書道部のカラーとして残っているとも言えるでしょう。

苦しさの味を知らぬ者は甘さも分らない。

第二に、ＯＢ会が「書心会」の名の下で組織化されており、現役とＯＢとの活発な交流が図られているということであります。ＯＢの方々の叱咤激励こそ現役諸氏の大きな支えでありましょうし、現役とＯＢが一体となって書道部の発展を目指してあるのが強く感じられます。

さて、前述の如く、著しく発展してきた書道部が、二十周年を迎えた今新たに考えなければならないことは、与えられたものの中で育つことに慣れてしまってはならないということです。書道部は幾多の優れた先輩諸氏により、現在、サークルとしての組織は定着し、細分化され、活発な活動が展開される中、揮毫大会を初めとする諸行事も地域の期待を担う恒例行事へと成長しました。しかしながら組織が細分化されればされる程、又行事が恒例化すればする程、疑問を抱き、深く考え、新たなる道を切り開いていかねばなりません。特に文化的活動を主体とするサークルに共通することとして、あまりにも精神面を重視し過ぎて、考える作業を怠たる傾がございます。

我々の身の回りを見渡しても、社会情勢は急速に変化しております。ここに於いて我々は常に自己の存在性を明確にし、模索の中から真理を探求し、人格の陶冶を図らなければなりません。よって、今後書道部の皆さんには、いわゆる書道部らしさを見失なわず、且つ、柔軟な思考の下、様々な発想を生かした活動をやって頂きたいというのが私の望むところであります。

最後に、書道部が創立二十周年を新たな飛躍の年として大きく羽ばたかれますことを心より期待する次第です。

後輩へ、いずれ書心会に入会される書道部の皆さん

昭和三十九年度卒
書心会副会長　安河内　克　行

早いものです。あれから二十年経ったのです。学生の頃、四十才位の人を見れば、ものすごく年寄りに見えたものです。私も三十九才になりました。今の学生諸君から見れば、私も年寄りくさく見えるのかな？気持としては、学生時代と何も変わっていないのですが……。

先日何年かぶりに、学生の練習を見ました。体がキュッと引き締り、熱くなるのを憶えました。赤木先生も私共が習っていた頃と、お変わりなくお元気で、嬉しく思いました。

私、書心会の副会長の役を仰せつかっているため、よく現役の方達とお目にかかります。よく気がつくなと思います。私が奉職していますのは、佐藤ビジネス専門学校といいまして、いわゆるＯＬを養成する専門学校です。求人先の人事担当の方からよく、この頃の若い人は、〃気働き〃が出来ないと聞きます。今の若い人は、言われた事には、極めて素直に、従順に働く特質を持っているが、概して自らの神経を働かせて〃気をきかせる〃芸当ができないということです。つまり、言われた事だけの仕事をすれば、それで良いと考えている新入社員が多いそうです。今、自分は、何をすべきか、何を会社が期待しているのかを常に気を使って、働かねばならないのです。書道部の役員を見ていると、この〃気働き〃か出来ると思っています。他の書道部員の方もおそらく、私が知

常に正しいことをやれ。人が喜ぼうが、アッといおうがかまわない。

っている役員の人達と同じように〃気働き〃ができる人達だと思います。そういう訓練が書道部には、知らず知らずのうちに、出来ているのでしょう。

日本の会社の組織活動は、お互いの立場や役割を互いに感じとり、気をきかせながら集団的に仕事をする習慣をもっています。西欧諸国のように、一から十まで、かんでふくめたように説明し、〃論理的に〃納得しなければ、動かないというのとわけが違います。今年も、プロ野球では、ブレイザー監督が退任いたしました。彼は、監督という職務を西欧的に論理的に納得したから、監督になったのでしょう。しかし、阪神球団上層部の気持、ファンの気持を岡田の件で、感じとることができなかったから、辞めなければならなかったのでしょう。日本の企業は、何かしようと思ったならば、まず、事前に誰かと相談し、あらかじめ承諾しておくことが、決定的な意味を持つのです。決して、自分一人で決めてやろうとしてはならない。これが、集団主義の慣行です。西欧の組織では、どの職位（ポジション）は、何を決めてよいか、が、ハッキリしているので、決まっている範囲内のことは、自分一人で決めて実施に移せばよいのです。ブレイザーが日本の野球になじめなかったのは、ここに原因があると思います。

私は、野球に関する考えを、くどくど述べる気持は、さらさらありません。書道部に入部し四年間頑張ることが、日本的〃集団主義〃の勉強に、はかりしれない恩恵をこうむるのでは、ないかと思うのです。私の職場にも、大学で何かのクラブに入っていた者を、優先的に採用するようにしています。クラブという小集団の生活が、社会においても役立つからです。

書道部の学生諸君の規律と、いわゆる学生らしさは、私共ＯＢにとって誇りとさえ思っています。この書道部の伝統を忘れず日々精進していただきたいと祈念いたします。

さて書心会々員の皆様、私、昭和五十四年一月のＯＢ会総会において書心会副会長を仰せつかりました。微力ではございますが、会の発展におてつだいさせていただきます。書心会というものを考えてみますと、たとえこの会を脱退したとしても、何ら困らないという。吹けば飛ぶような会です。脱退したから、もうお前とはつき合わないなどと、いうことは、全然ありません。しかし、大学時代お互いに励まし合ってきた仲間です。今思いますと、一番楽しかった青春時代に、同じ嬉び、苦しみを味わった仲間です。会員諸兄と共に、福岡大学書道部の成長をみつめ書心会をより強固なものに発展させていこうでは、ありませんか。

「是々非々で」

昭和四十三年度卒
書心会評議委員長　平井晴彦

書道部も本年で創立二十年をむかえました。これもひとえに関係各位のお導きのお陰であると、深く感謝致しております。

さて、本年一月二日書心会総会におきまして、私は評議委員長に任命されました。各期に評議委員が設けた理由として、一、会員が増し連絡が末端まで行き届かなくなった事、二、ＯＢ同志であっても年令の差に

困難を予期するな。常に心に太陽をもて。

よって意志疎通に欠けるようになった事が上げられます。それらを解決するため、評議委員は現学生との連絡やＯＢの連絡に当たらなければいけません。

また、現学生のＯＢへの希望や書心会からの要望などを協議して、積極的に希望が満たされるよう努力は致しますが、各期評議委員は各期人々の生活事情も理解しています。「無理」との判断がなされた場合はその判断に従っていただきたいと思います。

物事には出来る人、出来ない年代と人の生活は種々諸々です。出来ないからといってその人を怨んだりするものではありません。今、「出来る」といっている人も過去において「出来ない」と答えたのを私は知っています。「出来る」「出来ない」は人の世の常です。これが営利法人でない団体（書心会）の運営原則であると心得ます。みんなで仲良く生活していきましょう。

無　題

昭和四十七年度卒
書心会副評議委員長　遠　藤　信　廣

書道部の創部二十年記念機関誌に寄稿を依頼され、いざ文章を書こうにも在学時代にも卒業後もクラブのために特に何もしていないので何も書くことがない。いまさら学生諸君に説教じみたことを書く様な立場でもないが十年来書道部とつき合った感想とともに思いあたることでも書いてみる。

「クラブ活動とは」・「大学生活とは」学生時代よく合宿などの討論会などで議題にのぼる。誰しもが結論を出せず卒業していくのが現状ではないだろうか？　人間というものは元来誰からも束縛されることなく自由気ままに生活していきたい気持ちがあるのではなかろうか。

クラブ活動において練習その他行事等でなかなか自分自身の生活時間がもてないなどの不満が生じやすい、又中には自分自身の用件を優先する者もいるのではなかろうか。しかし諸君は何を求めてクラブにとびこんで来たのかを真剣に考えてみたことがあるだろうか。

クラブの生活、大学生としての生活ひいては一社会人としての生活の方向がわかってくれば!!

私は卒業後も一人者の気楽さからよく後輩をつれだして中洲方面を徘徊した。現在でも金と時間に余裕があれば酒でも飲みたい。大きく育つ可能性のある後輩と！

後輩への提言

昭和五十一年度卒
書心会副評議委員長　山　村　昌　次

本学のキャンパスで四季を通して特に美しいのは五月、つつじが咲きほこる頃だ。この美しい五月は学生諸君には特に重要な五月で何かをやるのには「もって来い」の大切なチャンスの時期でもある。心踊る若葉の五月であるわけだ。

ところが、大学にあっては所謂五月病という厄介な病気があって大学入学とともに無気力、無関心状態が訪れ、まさに消極的、かつ閉鎖的な

日常生活を送ることによって、他者との接触をも避け、他者の理解もなしに自己の世界だけに閉じ込もってしまうと云う極めて哀しい事が存在していて、これは全くいただけない。しかし、少なくとも書道部の新入生諸君にあっては五月病などどこ吹く風と先輩の指導を忠実かつ賢明に受け、日々活動に励んでいる事と思う。

さて、その新入生を指導する先輩諸君はそれこそ大変で東奔西走、休む事なく走り回っているにちがいない。ここで新入生に対し、お願いしたい事は決して中途半端で終わってしまう事のないよう、それこそフンドシの紐を締めて奮闘してもらいたいことだ。大学生活を後悔する事のないよう、実のある過渡期を大切に過ごす事だ。その中で先輩を知り、同輩を作り、後輩を育て、自己の存在を確立させる事だ。何でもよい、これだけは人に負けぬと云う自己につながる自信を自ら身につけることだ。

喜びを素直に表し、怒りを正面からぶつけ、哀しい時には共に涙を流し、そして楽しく有意義に四年間を過ごす事だ。決して最初から尻ごみすることなく、積極果敢に物事にぶつかっていく事だ。自らの行動哲学を捜し、自らの判断で良識ある学生となる事だ。先輩に早く追いつき、早く追い越す事だ。その努力を怠るとすぐさま今度は自らが後輩に追い越されるハメになるからだ。たのもしい後輩であり、やさしい同輩であり、厳しい先輩である事だ。自己をごまかさず、のびのびと生きる事だ。常に状況を見極め、行動する事だ。良識ある先輩となる為に、よき指導者となる為に、今五月病と闘う事だ。決して後悔する事がない為にも。諸君の不断の努力が必要なのだ。

一人の部屋

昭和五十三年度卒　高倉　潔

仕事を終え、夜、アパートに一人ふらりと戻った時のこの瞬間。
ＦＭのスイッチを入れながら眠りにつくまで
何をする事もなく過ごすこの瞬間、ふとわれに戻る。
横たわって煙草を蒸しながら回りを見回すと
殆ど見る事もない白黒テレビと一升ビン。
四畳半の学生時代と何ら変哲もない中で
ただ変わった事と言えば
新しいカーテンとバス・トイレ付きのちょっとだけ広くなった
この部屋。
学生時代は俺にとって言わば社会の予備校だった。
こんな暮らしの中で、清一杯やったという毎日の充実感から
何ら卑屈感やみじめさは起きて来ない。
平凡な事が幸わせなのかも知れない。
大切にしたい
この一瞬を……。

友情はもとより、聖なる枠なれど苦境にあえばさらに神聖となる。

チャレンジ

経済学部　一年　中村純一郎

今の俺には、「これが俺だ」と言えるものがない。それに過去十八年間にも若さに欠けていたように思う。若者はある目標に向かって力尽くまでチャレンジできる者ではないのだろうか。そういう面が俺には欠けていた。だから、このまま青春時代を無駄に終わらせてはいけないのであって、何かに向かって前進しなければならない。今、福大書道部に入部して何かに賭けようとしている。これも一種のチャレンジであろう。何かにチャレンジすることで人間形成にもなるのでは……。

高校時代、勉強にも遊びにも熱中できず、真剣さに欠け、中途半端な生活を送ったことを後悔している。この反省を胸にとめて、新たなチャレンジをしていきたいものだ。そのチャレンジすることを生き甲斐としたいから、俺は大学生活の四年間（何年かかるかわからないけど）を無駄に過ごしたくない。学生時代は、「こうであった。」と誇りを持って話せるようになりたい。

若者が平凡に過ごすのはもったいないし、現在十八才の俺は今から最もチャレンジできる年令にあると思う。そうは言っても何からやったらいいのか迷ってしまう。だが、それは俺自身がすべてである。不安は必ずつきまとうと思うけど、何事も前向きの姿勢でこれと決めたことを途中で挫折しないように努力していきたい。

今はまず書道に頑張りたい。もちろん学問も……。はやく大学に慣れ、有意義な学園生活を送れるように……。そして四年後の俺は…？

出逢い

経済学部　四年　松永義城

最近私は書に関していささか見解が変わりつつある。というのも、以前は何度も繰り返して慣れるという練習を目標にしていたが、それだけで本当に訴えられる書は完成しないということである。そこで対人関係が必要になってくる。数多くの人と接して確固とした自分の意志を確立した時、そこに各々の個性が現われる。また、それを伸ばす為には多くの人の助言が必要であろう。人と接していて、ふと書の訴えかけるものが自然にわかってくる様なこういう経験は果してなかったであろうか。

書では、筆をもつ時は「無」になれという。目先のことばかりにこだわっていては「無」にはなれない。人と接することは「無」になる為の一つの試練と考えて良いであろう。どうやってあの人と話をしようか。ある人にとってはいとも簡単にやりとげるかも知れない。しかし、そうでない人にとっては大変勇気が必要になってくる。そこには当然、失敗も生じてくるし、その結果絶望に追い込まれるかもしれない。しかし、それを乗り越えた時人は数倍大きな人間として成長しているのである。私はつい最近、「あなたは絶望したことがありますか。」という問いを耳にしたことがある。答は当然イエスである。人にはそれぞれのペースがあると思う。人の意見に流されて自分を見失うことほど愚かなことはあるまい。その為には相手に対しいつでも対処のできる体勢を作ることであろう。私はこの三年余このことに悩み明けくれ、今でも考え続けて答を求めている次第である。

時は最大の革新者である。

告白

薬学部　二年　天野仁子

前日、「先輩として失格」と言われた時、「失格」という言葉に、ひどく胸が痛みました。いつも自分の行なっている行動に対して不満だらけの私は、自己嫌悪に陥って、自分自身がもっと向上し、大人になりたいと願うばかりです。

よく先輩から、「もっと自分を前に出してみなさい」「自閉的な世界をつくらず、心を開きなさい」と言われるけれど、みんなの前にすべての自分をさらけだすことは、少し恐いような気がします。サークルの一つの大事な要素である人間形成、人間関係は、生涯を通じてとても難しい課題のように思えます。人間が信頼しあうには、お互いの努力と時間が必要な気もするのですが……。

昔、国語の時間に「この世の中には、自分がどんなに誠意を尽くしても、それがいつも相手に受け入れられるわけではなく、得てして受け入れられない場合の方が多い。」と習ったことを記憶していますが、自分が少しづつ年を重ねるにつれて、時々、実感することがあります。

なんだか、未来が不安と困難で真暗になりそうですが、私は色々なことに対して、「失格」をしないようになりたいのです。これからの人生人間らしい人間になりたい、人を真に愛し信じたい、自分を偽らず真実に生きたい、弱いけれど美しい人々の味方になりたい。自分も美しく生きていきたいと思う。欲ばりな私です。

今、思うこと

人文学部　三年　三小田佳子

今さら分り切ったことと思われるかもしれませんが、この頃、私、人は誰でも自分のために行動し、自分のために生きていると思うようになりました。その〝自分のため〟と言うのは、〝自分のためだけ〟と言う狭い意味での〝自分のため〟ではなく、何かをして、結果として後で自分のためになっていたんだと気づくような意味での〝自分のため〟です。

例えば一生懸命に何かに打ち込んでいる人は、その時は無我夢中で自分自身のことなど頭にないかもしれないけれど、そのように自分をさせるのは自分がその行動をするのを望ましいと感じ納得しているから、また納得しなくても無意識のうちに自分でせずにはいられないから行動するので、やっぱり自分のための行動だと思います。その行動の結果はその人のためだけに留まらないかもしれません。でもそれはあくまでも結果として表われることであって初めからそれを意図するのはどうかと思います。

私の大学生活の二年間を振り返ってみると、「一体、私は何をしてきたんだろう。」と言うのが実感です。自分の未熟さ醜さを必死にかばい、表面上をとりつくろって平穏無事に淡々と過ごしすぎたような気がします。その時は平穏無事に過ごしても後には何一つ残らないものです。あと二年間、いろんな経験をして、何か一つでもこれだけはと言えるようなものを体得したいと思っています。

いかなる悪事も虚言より始まらざるはなし。

心から涙を枯らす時

経済学部　四年　原田　明

人間の中には、親しみを覚える人間と、どうしてか親しみを感じない人間とがいる。客観的にみれば完全な人なのに、どうした訳かつき合う気のしない人、一流大学を卒業して大会社に勤めている人、あるいは目のさめるような美人だったり、素晴しい家柄だったりする人。それでいながらなんだかセルロイドでできた人形みたいな感じがしたりして、大切な生命が吹き込まれていないような人。社会の価値の「ものさし」ではかった限りでは大変点のよい人、それでいながら、生きていない人がいる。

人間にはこのように、どうしても「ものさし」では計り切れないものがあるような気がする。「ものさし」が役に立たない「何か」が人間にはある。

この「何か」が一番物をいうのは小集団においてである。大集団においては、権力とか富とか、「ものさし」で計れるものが幅をきかせる。大集団を維持するにはこの得体の知れない「何か」ではまずい。ハッキリと計れるものでなければならない。しかし、小集団では違う。

小集団の支配原理であるこの「何か」は、時にハートにグッとくるものであり、泣かせるものであり、形のないものである。互いの人間を結びつけているものは、大集団の場合はハッキリとわかる利害である。小集団の場合は利害でも何でもない。この「何か」と「何か」の引力である。

古代の人間にとって、集団とはすべて小集団であった。そして、その集団にあっては、その「何か」が支配していた。人間という、元来「ものさし」で計ることのできないものが、そのまま計ることのできないものとして生きていた。人間が人間として生きていた。ところが近代に至って、集団は小集団と大集団の二つになった。しかも、この二つの集団において認められないと、人間は満足できないのである。

しかし人間にとって、どちらが本質的なことかといえば、何が先にあったかということを考えただけでも、小集団がより本質的であり、いってみれば小集団のほうがより人間的なのである。この小集団では、その支配原理は「何か」である。したがって最も人間らしい人間が尊ばれる。人間らしい人間が重んじられ、親しまれる。人間らしい悩みを悩んできた人、人間らしい喜びを喜んできた人、その「何か」の豊かな人、生活内容の豊富な人、そうした人が慕われるのである。

しかし大集団では、出世という価値基準を最も完全に実現した人が尊ばれる。権力者が、金持ちが絶対に尊重される。一流大学の学生が、一流の職業についている人が重きをなす。

しかし、つき合いとか、友情とか愛情というのは、あくまでも小集団のものであり、「何か」の世界の中で起ることである。人類が発展するためには、大集団が必要なことはいうまでもない。しかし、この「何か」の失われた人間はカサカサしている。人間が本当に心を打たれるのは真心ある人間の行動だ。純粋さを失わない人の行動だ。純粋な心の持ち主や、真心のある人との交友は、後で想い出してもほのぼのとした暖かさがある。口先だけの人間との交友は、後で想い出すと何かいやなものだ。人が泣かされるのは、真心のある人間の行動だ。

その目に浮かぶ純粋な涙の枯れた時、人生も枯れる時だ。

サークル活動

理学部　三年　十代田　雄治郎

一九八十年代を迎え世界情勢は、社会的にも文化的にも危機に瀕している。オイルノショノク・アフカニスタン問題・モスクワオリンピックなど国際的な動揺は、新聞等を賑わせている。この様な状況の中で、我々日本人は充分世界に目を見聞き、それに対処出来る広い視野を持つことが必要であろう。大学はその目的に「広く知識を授ける」こと、「深く専門の学芸を教授研究する」ことを二つの機能として掲げられている。この点から見て、サークル活動もまたその目的の重要な部分であると確信する。故にサークル活動は教育の場でもある。個人の自主性と創造性を最大限に発揮して特殊性の探求と人間形成を目指す。自主性とは、他の保護・干渉を受けず自分で判断したり、処理したりすることである。しかし、個人で何でもやってしまえば、サークル活動の必要性はないようだ。個人一人の持つ空間より、二人で作る二次元空間は、二人の交わる部分と全体的に見れは二次元空間の広がりの方が、前者より大きいことは明らかである。多次元空間を為すのがサークルであり、逆に無限的に感じてつかみ所がないとも言えるだろう。こんなサークル活動で自己の才能や素質を知り、それを充分に伸ばし、健康な身心を育成することも大切であり、個人の独自性は互いに異なるから、当然他人の個人性も尊重しなければならない。

この点に関しては、相互理解、相互批判を行なう中で、互いの個性の開発が為され、交わるものが、強く広くなるのである。現代の文化は大衆化・一般化しているが、とかく享楽文化・消費文化になりがちな面がある。もっと人間性の向上につながる文化の発達に努力すべきある。一つの特殊性に於ける文化を創造して行くだけでなく、幅広い文化の追求、研究をすることが必要である。物に対する価値体系は多様化し、基準をどこにおくかは個人個人により違うが、本質的な部分を見失ってしまってはならないことは言うまでもないだろう。サークル活動の必要条件となるのは、自主的創造活動であるが、十分条件は定義出来ないだろう。なぜなら、数学的に一つの確定された解が存在しないからである。だからサークルは、組織する人間の連帯とチームワークのより強い円であることが望まれ、その円は全体的にも部分的にも書道部を担うものである。一人の単独行動に於いても責任は大きいし、秩序を守る精神が要求されるだろう。自分は関係ないから良いとか、自分さえよければ良いといった自分中心の考え方は、サークルでは通用しない。協力することを惜しまず、常に前進し、堅実な歩みの中で自分の目標・目的を達成させたいものだ。

一番大切なことは、どうしたら自分が、自分のものになりきれるかを知ることだ。

書道部に入って

法学部　一年　簑原千枝

書道部に入って数日が過ぎました。大学に入ったら書道以外の部に入ろうと思っていましたが、やはり書道の魅力から逃れることはできませんでした。私は高校時代、今まで書いたことのない芸術的な書に憧れてそれらに熱中していました。しかし今は基本的な字を練習して、少しでも上手になりたいのです。そして、これからの四年間はいろんな法帖をやって、もっと書に親しみたいと思います。

男の先輩方が学生服を着られ、練習の始めと終りに黙想があることには驚きました。しかし高校入学頃の応援練習が想い出されてとても懐しかったのです。

この大学に入学したばかりの頃は四年間も続くだろうかと思っていました。でも大丈夫です。私には書道部があるんですものね。先輩方がいろんな事を教えてくれて、何かいつも見守っていてくださるような気がします。そのことが一番ありがたいです。書道部の先輩方は、どの方も個性的ですてきな方のようです。入部したからには、いろんな先輩方や同輩の人達と接して、有意義な悔いの残らない大学生活を送りたいです。厳しいけれども、とっても優しそうな先輩方がお兄さまやお姉さまのように思えます。だから時にはうんと甘えてみたいです。書道部のことをまだあまり知らないのでもっともっと知りたいです。

憧れの女子大生になり、書道部に入部して今が一番幸せです。

私の生き方

人文学部　二年　渡辺泰子

まず、自分自身という人間は、欠点をあげればきりがない。人には流されやすいくせに人の意見を素直に聞くことができない。負けず嫌いなのに根性がなく、すぐ妥協してしまう。自己中心で心が狭く、自分の不幸は十倍ぐらいにして悲しみ、自分は世界中で一番かわいそうな人間だと思うわりには、他人に対してあまりにも思いやりがなさすぎる。世の中を要領よく、楽しく渡ろうとすることばかり考えて少しも苦労をしようとしない。何事に対しても三日坊主で、努力をしないうちにあきらめてやめてしまう。他人に甘く、自分に対してはもっと甘い。まだまだあるが要するに、人間の弱さ、醜さ、ずるさをかね備えているということが言えよう。

誰だって多かれ少なかれ、自分の嫌なところや欠点などがあると思う。私もこの文章を書くまでは、漠然としか考えたことがなかったが、最近、自分自身というもの、自分の生き方について真剣に考えるようになった。この世において、後にも先にもたった一人しかいない自分という人間。一生に一度しかない私の人生。何もしないまま、すべてに流されてこのまま終わってしまうわけにはいかないのである。

それにしても私にはまだ、人生の目的というものが定まっていない。もう大学生なのに今だに私は、自分が本当にやりたいこと、一生をかけてやれることを探すことができないでいる。小さい頃は、いろいろとなりたいものもあり夢もあったが、今はそんな気持ちも薄らぎ、このまま

ではダメたとわかっていながらも、なんとなく毎日を送っている自分が悔しくなる。

でも今からでも遅くはない、一日一日に目標を持ち、精一杯生きたいし、一日二十四時間を一秒でも無駄にしないように過ごしたい。またあらゆるものに積極的に興味を持ち、自分の生きる道を見つけたい。そして何事にも真剣にとり組み、自分の限界に挑戦するつもりだ。これからは今までとは違った、自分に納得のいく人生を送るよう努力したいと思う。

芸は道によって賢し

経済学部　一年　小田部　二三典

「芸は道によって賢し」という諺がある。技芸はその道を専門に修めることによって詳しくなるという意味である。

自分はこの福大に入学を許された時に、書道部に入ろうと決心していた。それは姉にすすめられたこと、また先輩にすすめられたことが大であるが、自分の可能性を試したかったからである。

自分は小学校以来、筆を持ったことのない全くのド素人である。また、小学校時代は「習字」そして今は「書道」といったような全くの違いがある。小学校時代は先生に手取り足取り教えてもらっていた習字。字のごとく字を習うことである。強制的にやらされていやいややっていた自分が何故自主的にやろうと考え出したのか。それは高校時代に僧侶である先生がおられ、その方が「芸は道によって賢し。何も自分が字のことについて知識がなければ他人の字のことについて批判をしてはいけない。」とおっしゃられた。人はよくあの人は字がうまいだの、下手だのと、あたかも字のうまい、下手でその人の値打ちが決まるかのように批判する。実際自分もそんな考え方をしたこともある。この「芸は道によって賢し」という一つの諺が自分の偏見を教えてくれたことは確かである。それから自分はそれならその道をやってみようじゃないかと思った。その時ちょうど大学の入学が決まり、回りからのすすめも伴って自分は書道部に入部した。

まだ大学生活が始まったばかりだから一抹の目標を失ってはいない。またそれを失ってしまえば、その時は書道部に別れをする時だと考える。これから四年間、少しでも多くの知識を得たい。そして全て知り得たとしても、他人の批判をすることは出来ないと考える。

二十二度目の春

工学部　四年　島村友博

いったいどうしてしまったのか、時の流れを的確にとらえることが出来なくなっている自分に気づく。変化することのないこの時間が、加速的に速度を増して流れていくように感じられて仕方がないのである。もはやこれまでの二十一年間は、ただ漠然とした数字としてしか頭に描くことが出来ないようだ。

幼い頃「死」というものを恐れ、薄暗い室の壁を見ながら眠れない夜が続いたことを覚えている。人間が自我を確立させた生きものであるからこそ、喜怒哀楽を感じ、死を恐れ生への希望を持っている。それは

動物についても同じようだが、彼らは本能的に危険を知り本能的に対処しているのだ。この世の全ての動物は、その各々について天敵が存在し、己が天敵となり、食物連鎖という機能の下うまくバランスをとっていると習った。彼らには自然という舞台の中で確実に役割が与えられ、そしてそのストーリーに沿って各自のパートを演じているのだ。

今日私たちの回りには大小さまざまな多くの社会が存在し、立体的かつ複雑にからみ合っている。このまるで蜘蛛の糸のように張りめぐらされた集団の中に身を置いて、人々はその役割を演じきれるだろうか。またしてその集団（組織）での自分の位置や立場を見い出せない人にとって。答は火を見るよりも明らかである。ともすれば多くの事に流されてしまうこの世の中、「若さ」を意識し特権的に思うのなら、己の血となり肉となるものを自ら見つけだし、それに精一杯ぶつかってみるしかもはや人間らしく生きる道はないだろう。

二十二回目の幕もまもなくおりようとしている。　二十三回目の幕が上がったら私もこの巨大な舞台の中である役割を演じていくだろう。ミュージカルの終りは実に感動的だ!!。私が演出した作品が他から称賛されるよう私は全力を出したい。

春だというのに、春が力いっぱい駆け回っているというのに、大きな岐路を目前にして何とも落着かない二十二度目の春である。

一年たって

人文学部　二年　児玉富美

一年たって思うことは、もっともっといろんな事を経験し、感じてみたいということです。

この一年は、書道部というサークルを通して学んだ事がほとんどでした。書技面はもちろんのこと、社会では味わい得ないであろう人間関係のすばらしさ、重要さと共に劣等感や疑問、矛盾を感じてきました。

そして今、私はこの事を大学の本来の目的である学問の探究という点からも学びとりたいと思っています。一年生の時は、一般教養がほとんどであったためもあり、その講義に対して興味がなくなり、ただ単位獲得を目的としていました。でも今回、自分の知りたかった社会や人間を専門的な立場から考えていくというコースを選択し、教職に関する講義を受けてみて、その場限りの勉強なんて何の意味もないのだと思うようになりました。しかし、それと同時に、その気持ちを維持していくことの難しさも同じ程度に感じています。自分が思っていた講義の進め方や内容と違って、幻滅したり、ついつい眠気がきたりして、あの新鮮な気持ちを持っていた時の事を忘れがちにもなります。

また、寮においてもクラブを離れた自分として、それなりに一生懸命仕事をしていきたいし、寮生や寮生を通じて知りあうことのできた人達ともつきあいながら視野を広げていきたいと思っています。

そしてクラブ以外の時でも学びとるものは無限にあるのだという考えを基にして、私は今まで以上にクラブから多くの事を吸収したいと思うし、それを自分なりに消化して同輩に投げかけたり、後輩に話していきたいと思います。

一年前の私とはまた違った面から期待と不安を抱いている毎日です。

人間よ。汝、微笑と涙との間の振子よ。

チームワーク

経済学部　三年　酒井昌弘

我々は、サークルという組織の中で活動を行なっている。既に御存知の通りサークルは、ただ人間が集まったものではなく、なんらかの目的、夢を持ち集り組織づけられたものである。ここで忘れてはならないのはサークルを構成組織しているのは、一個の人間なのであり、その人間は、なにかを感じ、考え、行動するということである。

このように様々な人間がいるのであるから、個人個人が主体性をもち、互いに相手の言っている事を理解し、また刺激しあい、信頼しあって仲間意識をもつことが大切なのではないたろうか。こうしてチームワークが生まれてくるのであると思う。

また、チームワークがよいと思われるのは、そのチームが、ある物事を達成しようとする段階において、その構成員一人一人がいかにその物事を達成する為に創造性を発揮するかである。

この創造性というのは実に大切なことであると思う。なぜならば、あるAという事柄を実行する際に、一人一人がこうしてやろうと考え、相互に意見を戦わせることにより、親近感が生まれ、それが信頼へとつながっていくからである。

ここで、別の角度からチームを見ると、チームには、リーダーとフォロワーが存在する。そして、リーダーたるものは、フォロワーの意見をよく聞き、また、ある時には的確な指示をフォロワーに対して与えなければならない。また、フォロワーは、何事もリーダー任せであってはならない。自主性を持って、物事を考え行動し、それに対して責任を持たなければならないと考える。

このリーダーとフォロワーの相互理解、刺激こそが、よりよいチームワークを生みだすと考える。

私は組織の中で何かをやろうとしているのであるから、これまで経験してきたことによって、今後多くのことを考え、よりよいチームワークを形成していきたいと思っている。

大学生として

商学部　一年　二村暁美

全ての束縛から解放された時、人は一体何を思い何を求め何をするのでしょうか。私だったらあまりの解放感にどうしようもなく困惑してしまいそうです。私の意見から言うと、人はある程度までは束縛されながら生きるのが一番理想的だと思うのです。そうしながら自分の置かれている立場と、自分の持ち得る自由を改めて認識していくのだと思います。

私にとって大学というものは、ある一つの歯止めになるもの、つまり自分の欲求のままに動きたい時にある程度まで抑制することができる、言ってみれば自分の中で自分を束縛するものだと思います。そして自由という言葉に該当するものは、自分でやりたいことを精一杯できること、つまりサークル活動だと思います。許された時間の中で思いっきり自由に躍動できる時間、こんなすばらしい時間を今の私に持つことができるのは、本当に恵まれていると思います。

大学一年生として書道部一年生として今の時期は緊張することばかり

全世界を知つて己自身を知らぬ者あり。

です。でもこの緊張感がなくなったら、私には充実した時間が全く残らないのではないかと思われます。初めての練習日には自分の字の下手さをつくづくと身にしみて感じさせられ、大変な劣等感を覚えました。これで四年間書道部の一員として務まるのだろうか、果たして先輩方のように思い通りに自分の字が書けるようになるのだろうか。と隠しきれない不安が私をつきまとい、自分に愛想がつきそうなそんな気持ちで一杯でした。でも自分で選んだ大学、そして自分から進んで入部した書道部ですから絶対にくじけることなく、最後まで精一杯頑張ろうと思います。それでもくじけそうになった時は、あのピンと張り詰めた道場での練習を思い出し、これからの四年間を充実したすばらしいものにしていきたいと思います。

十代最後の春に思う事

工学部　二年　横山　佳代子

大地が、空が、すべての物が、寒い殻から飛び出し弾ける、そんな春爛漫に、この白い原稿を目の前にし、一年前の日記を繙いてみた。

あの頃は、病院という白い四角の箱の中に閉じ込められていた。友がそれぞれに自分の翼で羽ばたいてゆくのを、焦りの気持ちで見送って、春という季節すらうらめしく感じられた。そんな時、ほしかった物は、空の広さであり、土の香りであり、木々の緑……自然の中をうっすら汗をかいて駆ける私であった。退院して見たあの木々の目に痛いほど眩しい青。髪を優しくなびかせてくれた風。今と少しも変わりのないはずの風景に、胸が痛いほどの感動を覚えた。幼子が新しい物を目にする時のように、私の目もまたそうであった。忘れかけていた心から何かに感動するという事を、私に思い出させてくれた入院生活であったようである。

あれから一年、毎日たくさんの刺激を受けて生きている私であるはずであるのに、今はどうだろう…。私を取り巻いている風景を、生活を、当り前のものとして流していってしまっているのではないだろうか。最初に痛いと感じた注射が、毎日うつと痛さを感じなくなるのと同じように毎日毎日、刺激を受ける事によって、心から何かを感じるという感覚が麻痺してしまったかのようだ。麻痺したままで生きていこうとしたから、生きるという事に対してすら、疑問を持ったのだろう。だから、今、この蜘蛛の巣の張ってきた感覚を大掃除して、一年前のあの心を取り戻そう。幼子の心を持ち続けていたい。美しいものを心から美しいと、楽しい事を心から楽しいと、悲しい事を心から悲しいと感じる心でいたい。透き通った心ですべてを見つめていけば、自然の語りかける声が、動いている春が、そこにあるのがわかるはずだ。小さな物語でも、自分の人生の中では、誰もがみな主人公であるのだから……。

大学生活にかける

経済学部　一年　江里口　吉光

厳しい受験戦争から、やっと解放された。草花は、燦燦と降り注ぐ春の陽を受け、今を盛りと咲き乱れている。小鳥たちのさえずりさえ、私の門出を祝福するかのようである。私の心中には、これからやってみたいことがたくさん存在している。まず初めに遊びたい、次に勉強もしよう。旅にも出たい。何ごとにも全力を尽して、ささいなものでもよい、

山中の賦を破るは易く、心中の賦を破るは難し。

何かをつかめたらよいのである。一瞬一瞬を力いっぱい生きることが、青春を謳歌することになるのたから……。

さて、ては、とのようにしてこれからの大学生活を送って行けばよいのであろうか。今、したいことは、たくさんあるのであるが、いざそれを実行して行くことになると、何か手掛かりが必要である。それには、何かクラブ活動に加わり、自分がたらけないように心がけ、また、先輩方の意見などを参考にすれば、よりよい生活が送れるのではなかろうか。そう考え、いろんな部を見たが、あまり多くて迷ってしまった。しかし、高校の時より、字を練習したいと思っていたのと、白と黒によってかもし出される、あの幻想的な雰囲気が気にいっていたので、書道部の門をたたき入部した。

入部して感じたことは、意外と礼儀などが厳しいことである。しかし、厳しいくらいの方が、しまりがあってよい感じがする。先輩方も、信頼でき、尊敬できる方々のようである。自分がこの書道部を選んだことはたいへん良かったようだ。まだ入部したてで何も知らない私であるが、先輩方の指導を受け、一日も早く立派な字を書けるようになりたい。

ややもすると、だらけてしまう大学生活を書道部に入ったことにより、有意義なものにできる喜びはひとしおである。これから四年間、書道部を通じ、努力を重ね、人生の糧となるように努める覚悟を強めている、現在の私である。

四年め

商学部　四年　原　千尋

半袖シャツの季節がやって来て、つつじがあさやかに咲き揃っています。

四度目のこんな季節はいつもと同じだけれど、来年はこの季節をここで迎えられないと思うと、焦りと淋しさで一杯になってしまいます。あと一年しか無いんですね。でも休みや何やかんやをひいたら、あとは半年くらいかな。

時間なんて、勝手なもんです。こっちの意志にかかわらずに、どんどん進んで行きます。すまし顔で過ぎて行きます。待ち合わせの時は、はやく過ぎてくれればいいのに、試験の時はゆっくりしてくれればいいのに、そして一年間が十三ヶ月あればいいのにと思います。でもやっぱり勝手なのは時間じゃなくて、人間なんですね。時をあやつれる魔法があるなら、覚えたいといつも思っています。いくら時が流れても、さだまさしの詩にあるように、私の人生の中では私が主人公なのだから、精一杯生きなければならないのです。だから、残りの一年を、過ぎた日々を、悲しかった日、嬉しかった日をすべて心に残しておいて、すこしずつ想い出しながら、友達を支えに、精一杯過ごそうと思っています。

ここまで書いたあと、どうしても何も思い浮かばなくて、気がついたら一週間たっていました。つつじが散って今はアカシアの花が満開です。そろそろ雨の季節ですね。自分でも何をいいたいのかよくわかりませんが……。まあ兎に角、あと何ヵ月か頑張りましょ。

高慢、愚者の決して失わぬ悪徳。

小論文ー課外活動

（サークル活動）

商学部　四年　桑原淳一

人間は誰でもこの世に生まれて以来の社会生活によって形づくられてきたものであり、また常に現在の社会生活によって形づくられ、その時代に即した様々な文化を生み出していく。この人間形成の過程に作用している要因は数多くあるが、大別すると㈠自然的環境㈡社会的環境㈢個人の生得的素質㈣教育に別けられる。しかし、これらの四つの要因のうち、前の三つは広義にとらえればどれも自然成長的な力である。自然も、社会も一人の人間にとっては環境であり、そこには価値の選択は行われず、また個人の生得的素質も生まれながらにして親から遺伝的に受け継いだもので、個人の意識とは全く独立に進行するものである。つまり、この世に生まれた人間がより望ましい人間を形成しようとする時、その人間形成の過程で教育の占める割合（力）は計り知れず大きなものとなるのである。

教育の本質は、そのとらえ方によって異なり、個人に視点を置けば個人の能力を十分に発展させる働きと言え、また社会に視点を置けば社会の維持、発展の為にその文化的遺産を次の世代に伝える働きとなる。しかし、いずれにせよ望ましい方向に人間を形成させる点では、一致している。

教育の機会も数多く考えられるが、主体となるのは学校教育、家庭教育、社会教育の三つと言える。家庭教育（家庭生活）は、子供の体の発達や性格の形成に強い影響力を持ち、また社会教育も、学校卒業後も絶えず新しい知識、技術の習得が要請される今日では、その役割も大きく、社会教育の充実も大きな課題となっている。

昭和二十二年に公布された教育基本法では、教育の目的、教育の方針、教育の機会均等……など十一項目に渡り教育についての基本原理を規定し、また同年同日に公布された学校教育法は、教育基本法に基づき、学校に於いて行われる教育について規定したものである。その学校教育法では、大学を「学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする」と定義している。条文の解釈問題は別にして、大意を汲み取るならば「広く、深く、一般的、専門的知識を習得し、人間形成をなす」と解してよいでしょう。

このような存在意義を持つ大学に於いて、実際学生が参加する活動には、正課活動（講義）と課外活動とがある。ここでは課外活動について述べていきたい。

大学、ことに総合大学の場合、一般、専門分野の学門の追求や人間関係は、教室、図書館、寮、下宿等、得ようと思えばその機会はいくらでも存在する。しかし、何故大学側が課外活動（サークル活動）設置の意義を認め、多大なる人手、費用を費しているかというと、それは課外活動が教科外の教育であって、社会人となる前の全人的教育（知・情・意の完全に調和した円満な人格者を育てようとする教育）に大きな力を持っているからである。

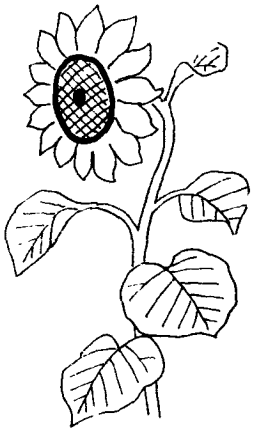
大学教育に於けるカリキュラムは「単位」制度になっているが、大学では人間としての人格がある程度にまで完成されたから卒業証書を渡す

利己心はすべての過失と不幸の源泉である。

のではなく、文部省の認定した一定の単位が取れれば卒業証書を渡すのである。機械がある一定の量の製品を製造したら、一日の仕事が終わるというような仕組みになっている。また、我々は、大学生活四年間に、自分はどういう人間であり、どういう適正を持っているから、どういう生き方をすべきかを常に考えておかねばならない。ところが現在のマスプロ化した大学教育の中で「自己認識」することは極めて困難である。「講義ー試験ー単位」という極めて機械的な流れの中に漂流するに過ぎない大学の講義の中で「自己認識」せよという方が無理である。小クループの中の人間集団のサークル活動に於いて、初めて大学生の一人一人が正しく自己を認識し、評価し、自己の性格を摑み、そして四年間のサークル活動を通して自己を知り、そしてそれを伸ばしていく方向づけをする事が出来るのである。仏教に「利行同事」という言葉がある。これは全体の為に利益となる事を実行し、人類の為になる仕事をする人には協力してその仕事を分け合う態度である。これはサークル活動に於いて初めて身につける事が可能だと言っても過言ではない。

サークル活動は、我々学生がどのような利用の仕方をしようとも、その本来の目的は教育にある、サークルの自主的な活動に参加していく過程で、一人一人の構成員がどのような問題場合に直面し、そこにある沢山の要素の中から自己の納得のいく解決の仕方をどのように見い出していくか、換言すれば各人がそれぞれの個性に応じて、如何に生き抜くかということの体験的な学習がサークル活動を通して行われているのである。

今、我々は福岡大学学術文化部会書道部の中で活動している。この書道部で勢一杯活動していく事も、大学の、教育の目的を果しているという事を強く自認し、自信を持って今後の活動に勤しんでいかれる事を部員一同に期待する。



知は生命の泉なり。

追想

商学部　二年　　丸田俊和

大学に合格して福岡へ出て来て、さて、仲間を見つけ出さなければならないと考えた。そういうとき、「どんなことを基準にして仲間になる人間を選び出すか」人によっていろいろな基準があるだろう。

わたしの場合はこうだった。出合う人はみんな初対面である。野良犬と野良犬が出会ってくんくん鼻を鳴らしながら様子をさぐる。二、三言、ちょっかいをかけて相手の反応を見る。そんなとき、わたしが興味を持って見ていたのは、何かをおもしろがる態度の有無だったと思う。おもしろいことをおもしろがっても、ちっともおもしろいことはない。なんでもない平凡なつまらないことに出会った時、それに対して、彼の下す論評の一言に精彩があると、ぞくぞくするような快感を味わった。こいつ、なかなかいいじゃないか。こういうやつと付き合っていられたなら、どんなにおもしろいだろう。

気の利いた言い回し。生意気な口ぶり、気どり、そういうこともあったと思う。今そんな場にいる自分の姿を見たら、顔が赤くなるだろう。おもしろいこと、相手を笑わせること、そのためになりふりかまわず下手糞に一生懸命になっている自分は、青くさくてかなわない。しかし、そういう才能にたけている者とともにいることは、とても楽しい。なんでもないものが、動的な活力のある心に触れると精彩ある感興を他者に呼びおこす。そういうことの出来るやつは、錬金術師のような力を持っている。ポケットに一銭の金がはいっていなくても、かれがいれば楽しい。自分もそうなれたら、どんなにかうれしいだろう。

私が今、一番関心のある事

商学部　三年　　原口豊子

「私が大学に入学して、今年で三年目です。」なんていう書き出しでは、もうあまりにもワンパターンなので、今年は、ちょっぴり違った事を書きますね。

世間では、よく「女らしさ」について、いろいろ言うでしょう。かういう私も、今年は、なんと二十一才だというのに、いつもみんなから「女らしくなれ」とか「大人っぽくなれ」っとか言われています。でも、時々思うんですよね。「女らしさ」ってどういうものかなあってね。昔からいう「女らしさ」っていうのは、素直でやさしく思いやりのあふれていることがいわれていますね。でも、果たしてそれが「女らしさ」のすべてでしょうか？確かに、これらが重要なポイントではあるでしょうがね。

たとえば、私の友人にいつも人前ではバカな事ばかりやってて、先生にしかられてばかりいて、それでいて頭はすごく良くて、男の子も一目おいていたような人がいるんです。その彼女に、なんと近頃、彼ができたのです。それ以前は、いつも人生論とかばかり話していた彼女が、今では、その彼のことばかり。でも私は、そんな彼女を見ていると、何ともいえない女らしさを感じるんですよね。

私は、男の人たちが望むような「女らしい女」にはなれない人間だと思いますが、たとえば、うんと年をとって、私が中年になった時、「女」

が「女」であることを誇示しないで、自然とにじみ出てくるような女らしさのある人間になりたいなあって思います。

バカな事ばかり書きましたが、春休みに読んだ田辺聖子の影響でしょうか。今一番関心のあることは、本当の女らしさとは何かということです。そして、ステキな人が現われたら、学校をやめてでも結婚したいなあって思う、今日この頃です。

とともかく、今年も、ダメでおっちょこちょいの私をよろしく。

書道部に入部して

法学部　一年　平田経子

四月十五日月曜日。バスを降りて、大学内に入ると大勢の先輩方が新入生勧誘の網を張りめぐらしておられました。私は勧誘に引っかかるのが面倒でしたので、なるべく新入生らしからぬ態度でキャンパス内を歩き回っていました。しかし、先輩方はわかられるのか、すぐに種々のクラブや同好会等の方々に声をかけられました。その中には私の興味をそそる様な同好会もありましたが、結局はっきりと決めることができずに早や四月も終ってしまいました。そこで周囲をよく見回してみると、すでにほとんどの新入生は、どれかのクラブや同好会に所属しているのに気が付きました。そして友達から「やっぱりクラブに入っていた方がいいよ。試験の時には助かるし、友達もたくさん出来るよ。」ということを聞きました。そこで私も、試験の時に助かるという心を多少持って、ややあせって、書道部に入部したわけです。ずい分いい加減だと思われるかもしれませんが、前から大学生になったら何かクラブに入ってみようという意識だけはあったのです。

そうして皆んなより少し遅れて五月に入部しました。まず第一日目の感想、「きつかった。」この一言です。もっとはっきり言うと、字を書く時には正座をしなければならないからです。家でもめったに正座なんてしないのに。そして何だか他の人達の書いている字が非常にすばらしく良く見えるのです。（事実良いのかもしれませんが。）

ところで、書道部に入ったのはいいのですが、私は自宅通学で家は柳川にある為に、大学まで片道二時間以上はかかるのです。帰るのが遅くなるのは実際つらいものです。今はまだ日が長いので朝たけは日の目を見られますが、冬は、お星様を眺めながら家を出て、お星様を眺めながら帰宅するという日の目を見ない生活が続くのです。

僕と書道部

商学部　二年　桑波田景成

書道部での一年間のまとめとしての春季合宿も終わり、現在に至っている自分であるが、早くもあの春季合宿で誓った意気込みが崩れかかっている自分が今情けなくてしかたない。また日々に変わる自分の心が不思議になることがある。昨日までは自分の生活の中に書道部が入っていた。しかし、今は春休みから一つの目的をかけてやっている警備のバイトが、今までの書道部があった部分に入り込んでしまっている。

現在はバイトもやりたいし、授業も、書道も、そして書道部も続けていけるものなら続けて行きたい。これまでに書道部で得たものは僕の人生にとってたいへん大きなものだと思う。思えば先輩達からおこられて

恥ずかしがることは、青年にとつて一種の装飾である。老人には一種の不面目である。

ばかりの毎日であった。そしてそのたびに僕はいつも考えさせられていた。自己について、書道部について、そして自分のこれからの行動について。たまにはくじけることもあった。自分がとても小さい人間のような気がした。

今、考えると本当にはっきりと書道部での一年間が脳裏に焼きついている。しかし、僕は今思っている。「書道」は、僕を夢中にさせてくれた。しかし、書道部に夢中になることはできなかった。それは現在の自分を見るとわかる。今まですごしてきた書道部に対しての自分と現在自分が思っている書道部とは同じものではないだろうか。

今は苦しさに飛びこんで、すべてが両立できるよう努力してみたい。もっと書道部に夢中になってみたい。あとはそれだけやれるだけやってみて考えても遅くはないのではないだろうか。

ひとがら

商学部　四年　田中孝路

様々な人々がこの社会の中に生活している。GNP世界第二位が示す様に、戦後急速な経済成長をとげた経済大国である豊かな？この日本の中にも各個人、環境の違いはあるにせよ複雑且つ悩ましい他人との関係を持っている。この富むる国日本？であろうとも戦火の中アフガニスタン、またカンボジア難民……どの様な環境、境遇に置かれようとも人は各々にそれぞれの生き方を持っている、横井庄一氏ではないが、自分の回りに人がいないということはまず有り得ない。どの様な状況にあろうと自分というものを持って、自分自身の存在を知り自分という人間を把握して生きているものと思える。

人間は自己啓発を行なおうとする本能があり、若い時にその傾向は増すものであると教わった。誰もが我を高めようとするが、自己啓発という行為はその本人自身の問題なのではあるが、本人だけにとどまる問題ではない様な気がしてならない。悩ましい人間関係を伴う複雑な社会、その各々の環境において不可欠な要素がある。人を知り自分を明かし、人との協力により物事を成すなど、いかに大切であるかは言うまでもない。ここで個人をみつめ重要となることが、その人の「ひとがら」であると言えよう。人から好まれる「ひとがら」である。持ちまえの性格、自分自身に対する信頼すなわち自信、他からの信頼、己の信念、生きざま、長所、短所、人格などの意味を持つのではなかろうか。

人格＝個人として独立しうる資格、複雑な精神現象が意識の中で融合統一されている姿。

複雑且つ悩ましい人々とのかかわりを必然的に受け入れねばならぬ社会であれども、人から好まれるような自分を求めて行くことには賛成しかねる。少しでもこの様なことが頭の中に潜在しているならば、いささか極端な意見と思われるかも知れないが、それは自分に対する信頼が過小であり、自立（経済的な意は除く）していない証拠であると言うことができるだろう。

どの様な環境にいようとも、自分が在り他人が在り生活を共にする。まず自分自身に対する信頼と自信を築くことが第一であり、その上で自分の生き方で自分の道を歩むべきである。あの人を裏切る様なことはしたくない、あの人の為ならあの人が好きだから私はこれが出来ると言ったような人づきあいが出来る様に良い「ひとがら」を目指したいもので

ある。

就職活動を前にして自分をみつめる今日この頃です。

六朝研究会は不滅です。！

我歩む道

商学部　一年　高橋福代

福岡大学合格……やっと鳥籠から解放された小さな小鳥のような私。私にいったい何が起るのか??不安な毎日がただ過ぎた。毎日が長く、まるで長い人生を一遍に背負っているように、何もかもが私を戸惑わせるばかりです。そんな時、私の目前に書道部という大きな暖かい手が与えられたのです。すなわち、私に歩む道を教えてくれたのです。何とすばらしい出来事でしょう。これを土台にして、輝かしい未来を築こうと私は強く決心したのです。

しかし不安というものは、いつまでも付きまとうのです。私は、書道といってもまるで経験がないのです。でも、もう一歩踏み込んだ道…どうして後に戻ることができようか。人が一練習すれば三も四も練習して人に負けないようにしたいです。それに先輩のよい指導のもとでやればやっていけると思うから……只、これしかないと思うのです。他にいろんな事をやりたいと思ったこともあるけれど、私が一歩たりとも道を踏み外すことがないよう今は、書道に向って

それゆえに、自分で考えて自分自身の道を捜すことより、より良い人生を歩むことは間違いないと思います。道＝人生だと私はいつまでも思い続けるからです。

漲（みなぎ）る精神

商学部　三年　成田睦子

最近、しばしば思うのです。精神的な飢えに耐え、凌ぎ、超越した人間はすばらしいなあと。そこには、精神的強さからくる目の輝き、自信があります。社会のどこであろうと、本式に真剣に自分の仕事をしている人ー それは、芸術家、スポーツ選手、職人……なんでもいいのですが、専門としてりっぱにやり抜いている人から、間接的に、いや、たまには直接的に何気なく言われたことに、はっとする、目をさまされたような気持ちになることがあります。何か弱いところ、曇っているところ、俗流に流されているところがあって、そこを刺激されたのではないでしょうか？

つらく淋しく悲しい人生に耐えられる強さをもった人だけが、真に人生を満喫しているなあと思うのです。甘えて生きるのではなく。現実に耐え、一人でも生きていこうと努力する人間になること、つまり教育の基本である人間を強くすることは、人生にとって一番大切なことではないだろうか？

理念を求めながらも現実を戦い抜く強靱な能力ー 理想や理念を求めながらも、なおかつ現実に負けないだけの人間になりたいものだと思う。理想や理念を失ってしまえば進歩や発展はないのだから……。

人生！自分は自分らしく生き、自分らしく死にたい。自分に与えられた人生を、他人と比較したりせず、力一杯生きたいものだ。絶対に、永遠なる点を凝視する目の輝き、自信が体から滲み出てくるー 必ず。死

傲慢は知恵の妨害物である。

に物狂いで生き、努力して、自分の限界に挑戦して生きたいものです。生死の境を越え、超然と生きている人、それが自信のある人ー、なんとすばらしい人だろう！

自分の内に大きな力が湧き起って、自分が生きていることの理由を、自分の存在の意義を、自らの生命の重要性を感じたい。

学生生活あと二年ー、探し求めたい、自らの使命を。

今思うこと

法学部　二年　竹本功憲

現代の社会において、「金」の威力というものが、まざまざと私達に見せつけられている。現在では、「金」があれば、どんなものでも手に入れることができる。しかし「金」よりも大切なものがある。今の人達は、そんなものを忘れている。強盗、汚職、誘かいなど「金」の魅力に取りつかれた人間の仕業だ。特に腹立たしく思われるのは、公務員の汚職だ。元来、公務員とは、国民の全体のために奉仕をする人達である。それなのに、自分達の「地位」、「名誉」、「金欲」などの安っぽい欲望に目がくらんでいると思う。公務員全体を言っているのではないが、ある一部の公務員のために、「公務員」というものが安っぽく見られる。公務員という、ある誇りというものを持って欲しい。人間は、「地位」「名誉」などがなくても、人間自身が持つ誇り（プライド）がなくなってしまえば、私は、その人は人間として失格でなかろうかと思う。私はプライドを持ち続けていこう!!

大学生になって

工学部　一年　西口公恵

広いキャンパス、多くの学生、広い教室での講義、その他様々な大学らしい光景を見ると自分も大学生なのだと思うのです。しかし、多くのイメーシを持ち、大学という言葉にあこがれていた私にとっては、まだ自分が大学生ではないような気がすることもあります。

大学に入ったらまず、単位を落さないよう勉強し、それから部活動に参加し、高校時代にできなかったあらゆるものに挑戦しようと思っていました。そしてまず初めに書道部に入部したのです。これといった理由はないのです。ただ書道へのあこがれでしょうか。高校時代から大学へいったら書道をしようと決めていました。しかし、不安は付きものです。高校の時、芸術で書道を選択した程度で初心者同様の私が初めての下宿生活で、びっしりつまった講義の中で、今は長く感じられる四年間を続けていくことができるだろうかと思うのです。しかし、何もせずに四年間過ごすのは、何と無駄なことではないかと思います。これからの四年間、有意義な学生生活を送るためにも、あらゆる不安、戸惑い、悲しみ、苦しみを乗り越えて行かねばならない、と思っています。

何もしないで四年間過ごした人よりは、きっと素晴らしい人生が送れるのではないかと信じて、何ごとにも耐えていくつもりです。そして、卒業する時は、私だけしか持たない何か素晴らしいものを持って卒業したい、本当に素晴らしい四年間であったと思えるようにしたいと思っています。

人の賢否は、初見の時に於てこれを相す。多く誤らず。

入部一週間の今の気持ち

工学部　二年　佐藤達也

私が今思うには、書道部というクラブは、意外と忙しい所だと思う。しかし、楽しい所であり、いつまでも皆と一緒に居たいと思う所でもあります。

私は、書道といえば、学校の教材でしかやった事がなく、基本的な事は、全くできないと言っても過言ではないと思いますが、二年からこの書道部に入って、一年生と一緒に練習をやっていて、みんな上手だと思いますが、自分も、みんなに負けないように頑張らなければならないという内に秘めた闘志も湧き出てきます。

練習時間では、先輩方や同輩の人が、時々教えに来て、私の分からない所や、筆の運び方などを指導してくださるので、多くの事を学び取れます。かといって、私は二年生ですので、先輩方や同輩に甘えてばかりでなく、生意気のようだけど、そばに居る一年生に、少しでもいいから自分が学び取った事を助言してやれたらと思います。

私は一年の時には、色々な事情があって、クラブに入り損なったのですが、四年間の大学生活の中で、何が残るか、と考えてみた時に、今の一年間を振り返ってみても、ただ語学の予習や他の教科の復習をする程度で、後は試験前しか勉強せずに、アルバイトをしたり、テレビを見たりで、だらだらとした生活を送っているだけで、実際に何も残るわけがないと思います。しかし、今年、書道部に入って、先輩方や同輩、そして一緒に入部した後輩達の性格や人柄を見ているうちに、自分の人格形成にも役に立つし、あと三年間の内に、もしかすると、途中で退部するかもしれないし、色々な事があると思います。しかし私は途中で止めるという事は、人生の階段から落ちて、原点に戻ったのと同じであると思います。人生、「七転び八起き」と言うけれど、転ばないことにこしたことはないと思うので、あと三年間、無事続けて大学生活に何か残すようにしたいと思います。

私の黄山谷観

経済学部　三年　重松裕人

黄山谷の特徴を一字をとって言うならば、力のこもった筆を紙につき立てて、グイグイと押しまくった様でいて、どことなく軟らかさを持った楷書体である。又、おも長で右上がりの手足をうんと伸ばし切った様な何ともおもしろ味のある字である。

作品として全体を見るならば、十分な字の積み方。黒い文字の群れが一列に並び、白い行間がその左右に並んでいる。その所々に、手足のはみ出しが、この黄山谷の作品の他に見ることの出来ないおもしろ味の一つに揚げられると思う。

私自身、黄山谷の「書」を書いていると、線香花火を連想しながら書き続けている事がよくある。いつか、赤木先生が黄山谷の書をたとえて、線香花火の様だと言われた事があった。その頃、字の型にばかりとらわれ過ぎていて、どうしたら良いものか行き詰まりを感じていた私にはなぜか、その言葉が素直に耳に入って来たのだ。

その線香花火という言葉の中から、じっと力をためておいて「ここぞ」

愚の特徴は、他の欠点をあげて己の弱点を忘れる所にあり。

と思った時に火花を散らすんだと考えた。力をためてじっと待つというのは、黄山谷の勢いのある字に少しでも近づくための、又筆のバネがいかにうまく使えるのか、自分自身の心の準備の為であり、火花とは、瞬発力と、手足の伸ばしのきっぷの良さである様に自分なりに理解したのだと思う。

これからも、色々な書を勉強しながら黄山谷も書き続けて行きたいと思う。又、黄山谷がどの様な生き方をしたのか、その人柄などを勉強することにより、今以上の興味を深めて行き、そこから、創作作品を作って行く過程として行きたいと思っている。

志も新たに

理学部　四年　郡　桂子

「今は何を為すべきか。」私は、よく自分に問いかける。「自分にとって、今、何が一番大切なのか。」学生生活最後の年を迎えた私にとって、学生時代にしかできないことのすべてが重要なのである。勉学にしろ、書道部での活動にしろ、没頭できるのは今しかないと思う。

人は、自由である前に自分に対して責任を持っているべきである。何をするか、選択する時にもこのことを忘れてはならない。別に「勉強ばかりしろ。」と言っているわけではない。自分で「遊ぶ時だ。」と考えれば遊ぶことに熱中するべきであると思う。

私は、ただぼんやりと別に意図もなく、時間を過ごすのが嫌いなのだ。もっと自分の目的というものを明確にしたい。しかし、これといった具体的な目標がない今の私は、「何をすべきか。」という言葉を毎日繰り返している。そうすることによって、おのずと小さな事でも見えてくる。しかし人間というものは、やはり楽を求める方へと足が向いてしまう。もちろん、私も御多分にもれず、何かと口実をつけて自分の考えにそむいた行動をとる。頭の中では、はっきりとわかっているのだ。「自分を甘やかしてはいけない。」と。

あとわずか一年の学生生活、私は、中途半端な心を捨て、すべてに精一杯ぶっかっていくつもりだ。それは、今まで私が懸命に取り組んできたことに加えて、これからの私の人生の大きな糧となると信じている。

「今は何を為すべきか。」

書道部に入部して

工学部　二年　覚　文博

クラブに入部した理由としては、次の二つがあげられます。一つは生活態度の改善です。一回生の時は気のゆるみから時間はありながら、勉強はせず成績はぶざまなものでした。よって怠け者の自分には尻に火をつけるようなものが必要だと感じたのです。二つめは、友人を増やしてつながりを広く持つためです。したがって別に書道部に入部しなければならないといった理由は特別なく（失礼！）ただ小、中学校の時、習字の経験があることと、空手を多少やっているので文化部に入部したいと思ったこと、そして文化部の中でもやりがいがあって、本当に自分のためになるものを考えて書道部に決定した次第です。

まだ一回しか練習に参加しただけですが、感想として書道と習字は全然ちがうものだと思ってはいましたが、実際に筆を握ってみるとそれが

実感として感じられました。書道部道場に初めて入った時には、予想通り道場独得のピーンと張りつめた緊張感が感じられ、それによって一人一人が紙に向かう時の真剣さ、厳しさが漂っていることがわかりました。

まだ先輩方の顔、名前はまだ覚えていませんが、感じとして俗に後輩から特に嫌われるような先輩はいないようで、書道の性質からか表面は穏やかでも、中身は筋の通ったきびしさのある立派な先輩方のように思いました。男性の先輩方の顔、名前は覚えられると思いますが、女性の先輩方の顔をいつも凝っと見つめるということは、あまりできないので、顔、名前を覚えられるかどうか心配です。

自分が今からやらなければならないことは早く習字の癖を取り除くということで、先輩方の親切な指導をもとに急いでやるべきだと思います。現在、迷っていることは、二年から入部したので部員としての態度がよくわからないことです。だからアドバイスをお願いしたいと思います。

大学生活に思うこと

商学部　一年　高杉素子

大学生活を始めたばかりの私には、講義や生活全体において、まだわからない点でいっぱいです。

小学校から高校までの小さな単位でまとまっていたものから大きくて漠然としたものに変った感じです。自由な生活ができるといえば確かにそうですが、何だか殺風景に感じられます。『自由になる』という事は自分自身の行動に置きかえてみると、押しつけられるよりずっとむずかしいように思えます。

大学とは本当に何をするについても、自分から進んでやっていかなければならない所だと思います。何も求めなければ求めないで学生生活は過ぎていきます。でも学生生活を意義あるものとするためには、やはり何か自分が打ち込む事ができるものを見つけ、目標を持って努力する事が必要であると思います。

私にとってそれが書道をすることによるものかどうかはわかりませんが、とにかく書道部に入ったからには、部の活動を一生懸命にやっていきたいと思います。今までの自分に対する甘えなどを取り除き、厳しさの中から、人間関係について学ぶところもたくさんあると思います。部活動を思いきりできるのは、学生の時だけであり、それが学生の特権であると思います。思いきりいろんな事にぶっかって喜んだり悩んだりしながら、学生生活を送っていき、後から考えて、やって来てよかったと思えるようにしたいです。

今、思うこと

人文学部　二年　和田直子

生きていれば必ず、どうしようもなく悲しいこと、つらいこと、きびしいことが巡ってくる。そんな時、どうしてよいのかわからずに迷い、眠れない日が何日も続く。そうしている間にも、時間だけは刻々と過ぎていき、いっこうに解決策は見つからない。ひとりで悩むから、ますます落ち込むだけで現実から目をそむけ、その場逃れで日々を送ってしまう。

だから、誰か、自分の心を打ちあけて相談する人を見つけることだ。

実るほど頭を垂るる稲穂かな。

それはクラブの先輩や同輩でもよいし、クラスの友達でもよい。私達の回りにはたくさんの人間がいるのだから、その中から選択すればよい。

また、自分でこうしようと決めることも大切だと思う。どういうふうになるか、それはわからないけれど、毎日を楽しく過ごす為に、まずは計画を立て、実行していく。時には心が崩れそうになるかもしれないが、囚われずに明るくよい方にものごとを考え直したい。

〃明るさ〃は必ずあるはずだし、今、眼の前にないとしても、もっと先にはきっとあることを、ただひたすら信じて努力すればよい。まるで霧が晴れたように目の前がぱっと明るくなり、先が見えることもあるだろう。そして、「どうしてあんなことで一生懸命悩んでいたのだろう。」と、自分のことがばかばかしく思えてくるかもしれない。そんなことを繰り返しながら、人間として成長していくことになるのだろう。

いま現実に冬が来て厳しいということはすぐそこに春がきているということ。だからくじけずにがんばろう。

〃冬来たりなば　春遠からじ〃

夜更けのティータイム

経済学部　四年　福　田　美由紀

夢を持つことさえも忘れてしまうような、自分さえも見失いがちなときでも、常に心がけていたいこと……少しでも成長しよう、進歩しようと努力すること。常に自分というものを冷静に見つめ、欠点に気づいて改めようとする、その気持ちが大切だと思う。

その為には、まず考えることが必要だ。考えることのない人はとても前進は望めない。悪く言えば今の自分というものに満足しているのだ。満足しないにしても、あきらめているのだ。くれぐれも言っておくけれど、決して今の自分に満足してはいけない、ましてやあきらめてはいけない。どんな人でも必ず他人にはない、良いものを持っているのだからそれを伸ばそうとしてみるのだ。

くよくよと、めそめそと、ぐちっぽくなることを、考えることだと錯覚してはいけない。真の思考は、あらゆる行動のなかでなされてゆくもの。自分の行動が思考を育て、思考が行動をとらせてゆくのだ。あくまでも、よき行動を生むための思考を大切にしたい。

また、人は一生闘っても、なくならない欠点を持っている。好きとか嫌いとかいった感情はどうしようもなく在るものだけれども、それを超えて好きな人の悪いところもわきまえ、嫌いな人の立派なところは尊んで、お互いに人間としての限界を大切にし合う思いやりは必要である。思いやりこそ人の心の美しさ。

思いやりは誰もが必ず持っているもので、思いやりのない人など本当はいないのだ。素直に自分の気持ちを表現できないだけなのだ。

人からの思いやりを感じる時、心暖まるように、他人に対する思いやりもまた感動を与えるのだ。私たちは、ともに生きている限り、如何なるときも思いやりだけは忘れずにいたい。そして、いつまでも変わらない心でいたいものである。

心には、理性の知らないそれ自身の道理がある。

プライド

法学部　三年　鶴田定司

一年前、クラスの一友人から、「君、どこのサークル？」「どのようなサークル？」と聞かれたことがある。私は、「書道部だ」と返答したものの、「どのようなサークル？」と問われた時に、書道部は好きだけど、何と返答すればよいのか悩んだことを憶えている。なぜそうだったのであろうか？結局、その時点では私に書道部員だというプライドが、まだまだ充分ではなかったのではなかろうか。

プライドとは、自分の才能や個性、また業績等に自信を持ち、他の人によって自分の優越性や能力が正当に評価されることを求める気持ち、又、その為に品位ある態度をくずすまいとすることである。自分の才能や個性はそれぞれ他の人と代ることのできない一つの存在であるし、その結果が何らかの業績につながり、さらに自己をみつめ、自己を知り、自己を充分に発揮することにより、プライドが自信につながるのではないだろうか。

ここまでは、主体を個人に置いて述べてきたが、サークルにおいても同じ事が言えると思う。……「書道部はどのようなサークルですか？」……私達は、サークルの部員だから、サークルの才能や個性をよく知り、サークルの価値をいっそう高めようとする心がけが必要だし、努力しなければならないが、サークルの存在に無関心であり、その価値の向上に努力せず、ましてその価値を無視しようとすることによっては、サークルのプライドや自信は生ずるはずがない。

自分にプライドを持ち、書道部にプライドをもち、サークルという組織において自主性の基で個人の創造力、行動力、思考力などをお互いに伸ばしていき、書道部を発展させたいものである。

大きな心を持って

理学部　二年　松藤美津子

感情のままに動く動物にはなりたくありません。いつでも自分自身を客観視する冷静な目を持っていたいものです。他人の愚かさを笑いたくありません。そうする前にまず自分の愚かさを笑うことから始めたいものです。自分だけの小さな世界に閉じこもりたくありません。いつも真っ青な大空に奔放自在な拡散する太陽の光のように大きな心を持っていきたいものです。いろんな人と接して、いろんな事を経験して、そして自己を形成していこうと思います。

人に接する際に特に気をつけたいのは、言葉使いです。人間同士のつきあいも、言葉の如何で生きたり死んだりするものです。無神経でがさつな言葉は使いたくありません。どんな場合にも粗雑な言葉は決して使わない、というのは、たいへん難しいことではありますけれども、相手の気持ちを敏感に察して、それをことさら傷つけるような言葉をつとめて避けることは、ちょっとした注意で誰にでもできることではないでしょうか。〃徳性としての礼儀〃というのは、相手の心の中に奥深く降りて行き、相手が自己の弱点や欠点と考えているものに、愛情を持って優しく触れそれを慰め、力づけるものである、というのです。相手の心の中に奥深く降りて行く、なんてそんな大それたことは私にはできないか

情は人の為ならず。

もしれません。私達は、無造作に口にした言葉で相手をひどく傷つけてしまうことがあります。そういうことのないよう気をつけたいものです。思いやりの心を持っていれば、それが自然に言葉にも、態度にも現われてくると思います。そしてそういうことがなくなってくると思います。〃いつも真っ青な大空に奔放自在に拡散する太陽の光のように大きな心を持っていたいものですね……！〃

一から出直せ

経済学部　一年　萩田広文

今から始まる大学生活に向けて、今、一番心の中で思っていること、それは、これからの日々を悔い残すことなく力一杯生きていきたいということである。

今までの自分は、十八年間何をやって来たのだろうか。何をやるにしても腰を据えてやったという事がない。「あの時もっと頑張っていたらなあ。」と思う事ばかりが頭の中に残っている。しかし済んでしまった事を今さら後悔してみても仕方がない。この十八年間の失敗を二度と繰り返すことなく、この経験をよくかみしめて、今からの人生の教訓にしていこうと思う。

福岡へやって来て、何もかもが新しい環境、友達、先輩、その他、今から顔を合わせるもの全てが自分には初めて目にするものばかりである。何事に対しても、新鮮な気持ちで接していくことができる。また、接していこうと思っている。これからは、二度と悔いを残すことなく、何事に対しても腰を据えて取り組んでいこうと思う。そして今まで得られなかった何かを、自分の心の支えとなる何かを得たいと思う。そうして少々のことではくじけない根性のある大きな人間になりたい。

竹馬で歩く様に今はまだぎこちないが
先ずはここから足を踏み出し
飾り言葉を投げ捨てて
『若いくせに！』なんて言わせたくない
奴がブーツのボタンをはずしていようと
奴が他人の生きざまを馬鹿にしようとも
一歩前のこの道を行かなければ
だって僕は僕を失うために生きてきたんじゃない。

自己をみつめて

人文学部　二年　手島玲子

いつの間にか形作ってきた性格のひとつとして、他人に自分をそうやすやすと見せてたまるものかというのがあった。決して、偽りの自分を外に出してきたわけではないが、肝心要の部分は自分だけが知って、他人に見せたくはないと思っていた。それは、弱みを見せたくないということでもあり、自分でもいやな欠点は絶対に人に知られたくないということであった。欠点は、いつか必ず直して人には知られぬままにしておこうと考えていた。この考えは、今から思うと、かなりしぶとく根をおろしていたと思われる。

ところが、やはりこの考えが崩れる時がやってきた。それは書道部の春季合宿であった。斑別討論の三日目だったと思う。自分では、わずか

ながらもある正当性をもって発言したつもりが、返ってきたのは、性格のゆがみまで指摘されるものだった。まさかクラブの合宿で、性格まで突かれるとは予想だにしなかったから、私にとっては二つの驚きだった。そして、今までの考えが誤りであったことを認めざるをえなかった。班員全部を前にして、私は、これほど自分自身を恥じたことはなかった。自分の知らない自分が、いつの間にか、どこかで自分をごまかしていたのだと思わないわけにはいかなかった。

春休みに読んだ本の中に、何よりも「己に対して忠実なれ」…つまり、自分をごまかさない精神が一番大切なのだと書いてあった。筆者は、英語の「知的正直」という言葉からこれを解釈しているが、この精神が、ひいては個人の進歩と向上につながるというのである。私はうなづきながらこの言葉をかみしめた。

新しい学年を迎えた今、自分をごまかさないこと、そして、自分の知らない自分を見つめていくことが、これからの課題だと感じている。

書道と私

工学部　三年　佐藤雅秋

私は今まで色々な字を書いて来ました。笑っている字・泣いている字・おこっている字・何を考えているかわからない字・おとなしい字……。色々な字と言ったら、書体だと思われるかもしれないけど、私が言いたいのは様々な表情を持った字の事だ。僕が疲れている時・悲しい時・楽しい時・落ち込んでいる時・悩んでいる時・それはすべて字に表わされた。私の字は自分のその時の感情の表われだった。字は生きている。でも作品化しようと思ったら、ある一定の表情の字では面白くない。落ち込んだ字・悩んでいる字の回りには、それを助けようとする字がなくてはいけない。大きな字の横には小さな字、黒の回りにはどこかに白がある。一文字では作品とは言いがたい。上下・左右があり、一つ一つが歯車のようにかみ合ってこそ作品になる。

書は単なる芸術ではなく、どこか人間社会と似ている。人間一人だけでは社会と言いがたい。又ひとりでは生きて行く事は出来ない。中には他人の事なんてどうでもいい、自分さえよければ…。と考えている人もいるみたいだが、そんな人はいつかきっと天罰が下されるだろう。もし「自分一人ぐらいなら……。」と考えている人が沢山いるとしたら、世の中は成り立たない。やはり回りに色々な人間が居てお互いに回りを見て、感じて、助け合ってこそ社会なんだ。それが人の道なんだ。口では簡単に言えても、実際はものすごく難しい事だろう。私は今書道部という小さな社会に居るわけだが、せめてその中だけでもいい。作品化を頭においておきたい。

情熱

商学部　四年　吉冨りえ子

何年か前、情熱という題で文を書かれた先輩がいた。その時は客観的に目を通しただけだったけれど今自分がしようとしていることを考えてみると、おそらくその先輩と少なからず同じ気持ちになっているような気がする。

すべてのものに情熱を持ちたい。人間的研究欲旺盛な私は将来カウン

怒りは無謀を以て始まり、後悔を以て終る。

セラーになろうかとも思ったりする。しかし情熱とは純粋なものでなければならない、営利的に考えてはいけないと思う。情熱を傾ける対象は様々であろうがクラブにしろ、勉強にしろ、その中に十分浸っている人間というのは知らない間に情熱を傾けているのではないか、それこそ純粋な情熱だと信じたい。

若い時は精一杯情熱をぶつけあって挫折しても立ち直ることは可能であり、またそれが自己の成長にもつながる。中途半端やシラケ、にえきらない態度…今の世代にはありがちなことだけれど、一度や二度の失敗は許されても失ってしまった若い時代の日々は取戻せない。自分が一生懸命何かをやったと人に言えるよう自分を燃焼させた時があってもいいのではないかと思う。

一生懸命から情熱へ、私には子供から大人への脱皮であるような気がする。広い視野を持ち形のないものを愛する人間でありたい。

情熱……私にとって絶対失くしてはならないものである。

大学生活に入って

工学部　一年　山城邦敬

高校からあこがれの大学へ来てみて、大学とは何と勝手気ままな所だなぁと感じた。それというのも一応クラスといえるものがあるにはあるけれど、HRの時間がなく、自己紹介などがなくて、友達を作る機会が極端に少ない。特に僕のように、顔見知りの人がいなくて、しかも自宅から通学しているのは、寮におけるような友達付合いもなく、全く一人取り残されているような感じがして、空しく、こんなことでクラスの連帯など出来ないのではないかと思っていた。おまけに、講義なども聴きたい人だけ聴いて、聴きたくないやつは寝ている。このままでは、だらだらした生活に溶け込んでいきそうに思えて、「俺はいったい大学に一時間当り千円の高い授業料を払って何をしに来ているのか、このままでは〝パープリン〟になってしまう。」と思った。この危機から脱出するためには、サークル活動に参加するしか方法がないと思った。サークル活動にさえ参加すれば、友達も多くできて、けじめのある生活を送れると考えると、書道部の存在ということを思い出した。というのも、福大書道部主催の西日本揮毫大会での制服を着ている書道部の先輩がたを見ていたからだ。そして僕個人、大学では制服を着ている人が少ないという考えを全く打ち破る規律正しいサークルなのだと思えて、深く印象に残っていたからだ。

そこで今、僕は書道部に入部しました。サークル活動は、多少、驚異の世界のように感じています。書道部に入れば、心の広い、けじめのある、輝かしい大学生活を送れるように努力したいと思います。先輩、気合いが入っていなければ、ビシビシ鍛えて下さい。未熟者ですが、よろしくお願い致します。

書道部に入って

工学部　二年　石原　透

昨年、何もクラブなどの活動に所属していなかったため、学校と下宿をただ何となく行ったり来たりの往復で一年間を過ごしたような気がします。また、そのような過ごし方をしているので当然ながら友達もでき

ず、おもしろくなかった気がします。そして、そのため生活にも張り合いがなく、勉強もあまりしなくて成績も思わしくありませんでした。そこで今年こそ何かのクラブに入り充実した学生生活を送ろうと思い、このクラブに入ったわけです。

このクラブに入っての第一印象は、さすがに礼儀正しく、けじめがよくなされているということです。「黙想」で練習が始まり、「黙想」で終るところや挨拶の徹底には、少しびっくりしました。また、時間が始まったら個人個人で書き、それで終わりかと思っていたら、上級生が回り、いろいろアドバイスを言ってくれることにはびっくりしましたし、うれしくもありました。それから、同じ学年で会を開き同学年との和を深めていくことも行われているようで、いいことではないかと思いました。

私がこの書道をやってみたいと思った理由に、字をうまく書けるようになりたいというのは当然ですが、その前にこの頃めっきり低下した集中力を養うことと、落ち着きをとりもどすことがあったのです。このクラブを見てみるとこれらのことを可能にしてくれそうな気がしてこのクラブに入って正解だったと思っています。

私は今年このクラブに入ったわけですが、いきなり後輩もできたわけです。二年生として恥ずかしくないよう早くこのクラブになじんで、そして後輩にもアドバイスができるようになりたいです。最後に、目的を達成するためにも、勉強とクラブを両立できるよう一日一日頑張っていきたいと思っています。

視野を広めよ

経済学部　三年　大家一之

ミュンヘン五輪で金メダルに輝いた全日本男子バレー。それまで世界の四流、五流チームで負けてばかりの弱小チーム。その弱小チームを率いて世界の王座にのし上げた松平監督と池田（現姓中野）コーチの話である。この中野コーチは現在、全日本の監督として復帰したが、松平監督とは性格が正反対で、お互いウマが合わなかったそうだ。それでも名コンビといわれた。何故ウマが合わない男を自分の片腕としたのか。松平氏が言うには、「私が人間的にできていたからではない。嫌いなヤツと必要なヤツを区別できた一番の理由は、世界一になりたいという欲望が他のあらゆる欲望よりもはるかに次元が高かったからだ。」と。好き嫌い、ウマが合う合わないといった次元ではなく、もう何段階も上の次元でコンビを組んだからだということである。

同じように、サークル員の中にも好きになれないタイプの人がいるかもしれない。しかし必要でない人は一人もいないと思う。多くの人間のタイプが違うことで、お互いが成長してゆく事ができるのである。

うわべだけで「あいつは嫌いだ」とか「俺とウマが合わない」といって相手を避けることは、もったいないような気がする。「嫌い」だからこそ「ウマが合わない」からこそ切磋琢磨しながら成長してゆくものだと思う。もっと大きく目を見開いて、自分の殻を打ち破る為にも、何段階も上の次元で考えられるような自分でありたい。

時間がそれを軽減し、柔らげてくれないような悲しみは一つもない。

今日から

法学部　二年　崎坂真弓

今、「贈る言葉」という歌が流行していますが、私も、高校時代すてきな「贈る言葉」をもいました。

私は思う
青春のすばらしさ、尊さ、苦しさ……
それらが
自然の法則に従って風味よく混り合って
そして
私達若者の力強い希望となって
信念となって燃え上る炎となり
その激しくも短い炎を
若者は
いつまでも断やすことなく
灯もす使命があるのだ、と。

このような言葉だったと記憶してます。

今の若者は、三無、いいえ、五無主義などと言われていますけど、右の言葉を借りれば、そういう人は、炎がくすぶっているのではないでしょうか。

この言葉を贈ってくれた彼女は、以前からの希望どうりの専門の勉強をしています。彼女は、本当にこの言葉どうりに頑張っています。私は、というと、まだまだくすぶっている状態です。いつも、何か冷めた部分があって、本当に熱中することがないみたいでした。今しか出来ないことがあるはずです。勉強、クラブ……

私も無気力人間的な殻を破って、断えることのない炎を灯していきたいと思います。また、私の回りの人すべてが、このような炎なるものを心に灯していれば、本当にすばらしい日々となるに違いありません。

こんなちっぽけな話を、心に留めておいて悔いのない毎日を送ってみてはどうでしょう。

大学生になって

法学部　一年　川嶋ゆかり

福岡大学に入学し、早くも一ヶ月が過ぎてしまいました。高校時代はただ何となく大学のキャンパスというものにあこがれを抱いていましたが、いざ入学してみると、見るもの聞くもの皆すべて新しい事ばかりで大きな不安の渦の中に、一人ポツンと立たされたような感じがしました。何もかもが今までとは違う……。そんな中で何回となく高校時代を振り返ってみたものでした。

あるきっかけで、オリエンテーション実行委員会に入る事となり、いろいろな仕事をする中で、少しずつ大学生活がわかってきたような気がします。その実行委員会も今はもう解散し、こうして書道部に入部する事になりました。まだ入部したばかりなので、書道部の事は何もわかりません。大学に入学したての時と同様に、また未知の世界へ飛び込んでいったようで、私の心は不安で一杯です。

初めて練習に参加した日、あの練習の規律正しさにとてもびっくりし

ました。あんなにたくさんの部員が必死で〃書〃に打ち込んでいる姿には、何か心に感じるものがありました。高校時代にも書道部に入っていましたが、その時の練習風景とは全く違っているように思えました。私は即、福大で大会が行なわれた日の事を思い出していました。あの頃は福大の書道部の規模の大きさに驚き、なにかしら恐ろしさを感じていたのですが、今、その書道部に自分がいるのだと思うと、ちょっぴりおかしな気もします。

とにかく現在私は書道部に対して大きな期待を持っているとともに、自分自身も精一杯努力しようと思っています。そして一日も早く、書道部の一員として溶け込むことができるように頑張りたいと思います。

道　草

法学部　四年　上田信一朗

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。

不安だらけの毎日に、急せりの言葉が目に浮かぶ。何とかやるぞと気負ってはみるが、心の中ではケ・セラ・セラ。とにかくも、明日があるぞと思いつつ。

春季休暇中、金の為にのみ単純作業を繰り返す毎日であったが、私は一カ月と続かない。それを二十年、三十年と続けている人を見ると尊敬という言葉が価する。生計を得る為、子供を養う為に働いていると思うと、今の自分が恥ずかしい。仕事が終わり、家庭で重荷をおろし休みたいのは誰しも同じ。かく言う私も同じであった。しかしてその実態は、チャンネル争い、口喧嘩。嗚呼、「色即是空」「色即是空」。

己の名誉、地位、権力を得る為に他人を蹴落とそうとしている人でかさかさしている現代社会。何かしら悲しさ、淋しさ、虚しさが頭の中をはしる。混乱と彷徨の中、この学生生活が特に感慨深く感じられ、実り多かるべき三年間であった様に思われる。そして、来年社会へ潜り込むわけであるが、こんな冷えきった人間関係がまかり通る世の中にだけはしたくない。また、冷静に自己反省もできない思い上がった人間、調子づいた人間になりたくないし、その様な人間をつくりたくない。と考える今日此の頃である。

小学校卒業時、尊敬する人の欄に私は「エジソン」と書いた。この尊敬という言葉、実は知らず、回りが皆、偉人ばかりを書くので彼を書いたわけであった。しかし、もし大学卒業時、尊敬する人の欄があれば、堂々と書くであろう。聞かれたら応えるであろう。

〃両親〃……と。

限りない　時の流れを　塞止めて
今までは　飛びたつ前の　道草よ

笑いなき人生は物憂き空白なり。

個性

法学部　二年　城戸　信比古

人間の個性というものは一体どんなものだろうか。一般には個人独特の性質と言えるかもしれないが、それが理解されるのは稀であり、物事に対して純粋な気持ちで没頭できた時に初めて現われ、無限であると考える。

しかし無感動な若者、自己中心的で小さな殻に閉じ込もりがちな学生が多い現在（自分も例外ではないかもしれないが）、無限の個性、また可能性を知ろうともしないし、知る事もできないまま個性を無限に広げられるこの時期を有効に使っていない。自分はサークルに参加する事で、数多くの経験をし、少しでも個性を理解したいと思うが、時にクラブに対して圧迫感を感じることがある。これは余裕のなさから来るものが多分にあると思うが、根本的にはクラブに対する積極性が不足しているのかもしれない。これではクラブによって個性を見い出すことはできないから、早急にこの問題を解決しなければならないと自覚する。

書道に関しても同様に純粋な気持ちで紙に向い、書道に没頭できれば個性は無限の広がりをもって作品に現われるだろう。作品に個性を出せればすばらしいものになるだろう。しかし個性を作品に出すのは容易な事ではないし、作品によってその人の無限の個性を理解するのは一層難しいと思う。これはどんな芸術においても言える事である。

人間が生きて行く上でその存在感を味わえるのは、自分の個性をわずかながらでも理解し得た時であるように思う。自分にとって最も必要であると思われる「自信」は存在感を感じるごとに大きくなると考える。

『個性を理解しようとする者は無限のこころを知らねばならぬ。無限のこころを知ろうと思う者は愛のこころを知らねばならない。愛とは創造であり、創造とは対象において自己を見出すことである。愛する者は自己において自己を否定して対象において自己を生かすのである。」

ー　三木清「人生論ノート」より

切に思う事

経済学部　三年　浦　泰介

大学に入ってもう三年目に入りました。この間一日一日が長く感じられていたのに後二年、つまりあと半分かと思うと短かいものです。

僕の大好きな言葉の中に青雲の志という語があります。中には知っている人もいるかと思うが意味としては、立身出世の願いとか聖人賢人になろうとする気持ちとかがあるそうだが、僕はこの言葉を次のように読みとっています。青空の中に一つ白い雲がある。その雲は時間が来ると形も変わるし、位置も変わる。その雲の形などの現状を見切るには今しかないし、高い空にあるかわり続ける雲を自分の目に焼きつける事。そして空の様に高い所にある雲を自分の物とできる様な人間になれ!!とこのようにとっています。書道部も今年で二十年であるが、今も高い所に目標をかかげている。そして毎年、各代が基本方針を打ち出して実行してきました。そうすると空が書道部の目標で雲が各代の基本方針であろう。もっともっとあの空の青のように我々の書道部も各代に打ち出された基本方針を消化して澄みきった部を創り上げていきたいし、又、個人

己の如く汝の隣人を愛すべし。

個人もあの高い空のように大きな望みを持ち毎日を過ごして行きたいと思う。

特に僕にとって大学生活は、あと二年となり今迄以上に目標を確実に見い出して一日一日を充実したものにしたいと思う。そしてあと半分を今迄以上に大きくしてみたい。人生は、長い様で短いものだろうと思うし、その人生の中で最高のものにしたいし、僕はできると確信しています。最後に自分が好きな歌の一節を紹介します。〃別れ道は運命さ、どの道行こうと俺達の行きつく所へまっしぐら、誰の口出しも無用です。あせってみても始まらぬ、人生のんびり生きてやる。後にさがれぬ道ならば大地を踏みしめて歩きましょう〃

だから大学時代に自分の人生をじっくり切り開いて行きたいのです。のんびりと!!

振り返りながら

商学部　四年　扇　寿美子

朝の光が目に痛い。そのひとときー。一人ぽっちの自分　大地の上に投げ出されたかのように。あまりにも小さすぎる自分。自然は何故こうも壮厳で麗わしいの。息苦しい人間社会から逃れて、平凡ながら柔らかい優しい自然の懐に溶け込みたいと思う。息苦しいとは言っても、私はこの人間社会が好き。愛しいのは人の心　慕わしいのは自然の誠　私はこの両方がなければ生きていけない。自分を磨く為の手段は色々あるけれど、「自然は一巻の書物である」と、ハーヴェイは言う。海は茫々としていながら、何かしら〃意〃がないようで……。だけど、汲んでも汲んでも尽きない味わいがある。あし心にしみる。この茫漠とした荒海を乗り越える為に、今、ひたすら自分を磨くことね。ある哲学者が言うように、人間は自ら成るものに成るのである。私の人生航路の展望は、やれば出来るである。すばらしいものが見えてきた。これは私が書道部から送られた最大の贈り物。「光陰矢の如し」　今日という日は二度と帰らず。「虎穴に入らずんば　虎児を得ず」　今まで歩んで　た道、道と言っては大げさだけど、大人になりきっていない私、人生に対しての信念、観念も。この残された学生生活のうちに、ある程度はっきりしたものにしなければ。

多事多難な四年生。幕開けられて早七日。時の流れに従わずして、世を送るべからざるを以って、講義受けらざるを悔う。我、とりとめもなきつれづれなる秘事書くにあたりて、日々の無常を知る。殺伐としたる時、緑の目に入らざるは、精神の源さえ焦るなり。この思ひ　愚なる者にて、真の人ならず。いざ勉めん。

こうして、また時が去ってゆく。アインシュタイン・ヘーゲルよ、時間の歩みを遅らせたまえ。朝、鳥の鳴くを聞き、一日の始めとする。三度省りみよ。今日の私を。

は　る

人文学部　二年　野村　敬子

今年は、桜の花が満開に咲き誇る姿を見て、さわやかな春を感じた。華やかに咲く桜をここ何年か忙しさで、半分妬ましさで眺めることしかできなかった。いつも暗い春。今年は優雅なものだ。風に吹かれ舞い落

行為とは、人が己の姿を写す鏡なり。

ちる花びらに手を指しのべ、キャンパスを歩いて行く。

去年の「荒鷲」を読み返し、いじけきっていた自分に今でも胸がふさがる。けれど、もうそんな自分は去年でおしまいだ。もうたくさんだ。大学へ入って一年、書道部に入部し、自分の中で埋め尽くせないものを一つ一つ埋めていけたようにも思う。まっしぐらに突っ走って来て、ふと立ち止まった時、これでよかったのだろうかとも思う。入学当時に描いていた〃生き方の予定〃が全く逆方向に動いているのだ。しかし、今はこの中でやって行くことしかないと思っている。そして、自分はこの書道部を乗り越えて自由になりたい。いや、そうしなければ何も始まらないと思っている。

呉昌碩を書くようになって思うこと。もっと冷たく生きたい。生ぬるい生き方よりも〃冷たく〃。いつだったか、ある先輩に「君の字は冷たいね」と言われ、その時は胸に突き刺さる程辛い言葉だった。けれど今は、優しく暖く響き返って来るそんな快感を覚える。「呉昌碩は激しい字でもその中に柔らかさがある。そういう線が出せるといいがね」と、どの先輩からも批評を受ける。呉昌碩のもつ柔らかさ、優しさも作品においては不可欠のものであることは解る。が、唯あの厳しく凄まじい線が好きでたまらない。

この一歩

法学部　一年　柴田直人

大学生活における第一歩を書道部に向けた。部室のドアを叩くのは、かなり勇気を必要としたが、思い切ってノックして、先輩方に話をして戴き、第一歩を踏み出すに足るサークルと確信しました。自分なりに決心して入ったからには最後までやり遂げたい。やるからにはうまくなりたい、せっかく踏み出す一歩だから後戻りはしたくない、まして仲間（一回生）と踏み出すこの一歩、出遅れないでついて行こうと思います。

中学、高校と一日一日を振り返っては後悔と溜息の日々を送って来た、そんな日々は過ごしたくないのです。今日の一歩は明日のため、明日の一歩はその先の……。たどりつく日はわかりません。たどりつけないかもしれません。だけど、いつか振り返った時、納得がいくようにしたいのです。この一歩は、書道、この一歩は、勉学、この一歩は…その一歩を起点にあらゆる方向に進みたいと思います。今の小さな自分を少しでも大きくするために努力したいと思います。

高校時代、短期間ではあったけれど書道部に在籍して、その間に経験した合宿や大会は、高校時代を振り返った時に確かな時間として存在しています。そしてしばらく書道から離れて感じたことは、やはりこの道（書道）を進み続けたいという決意、別にどうこうと言うのではありませんが、ただ、またやりたいと感じたのです。

時には、後ろを振り返って見るのもいいことだろうけれど、先ずはとにかくこの一年、しっかりと前を見て進んで行きたいと思います。一本の線は小さな点の連なりだから、大切に踏みしめて行きたい…この一歩一歩を！

六十の手習い

法学部　四年　久保山　豪

最近、頻繁に「八谷のじじい」とか、「吉冨のばばあ」という会話を部員の皆さんは一度は耳にされたことでしょう。その実、四年生の集いとなりますと、さながら老人ホームののとかなひと時であります。

私は、老人がとても好きです。何故かと申しますと、その老人方の一挙一動をじっと観察しておりますと、本当に可愛いいと思うんですよネェ。（これは、世の老人方に対して失礼になるのですが）容貌一つにしても、歯の抜け落ちた口を精一杯にもごつかせながらニマッと笑ったあの毒々しくない笑顔、そして顔面に力一杯刻み込まれた長く無数の皺々。その一人一人の老人の激動の人生を無言のうちに物語っているような気がしてなりません。

私の老祖母も御多分に漏れず世の老人方と等しく、なおかつ、腰はくの字に曲かり、その歩く姿は頭が地につくのではないかと思わせるほどです。しかし私は、この祖母と相対する度に、この人物の偉大さ、寛大さを感じるのです。私が子供の頃は、よく百人一首を暗誦しまして、この〝とし〟ばあさんと競争していたのですが、いつも私の方が首をうなだれておりました。推定年齢八十才を過ぎた今日におきましても地道に勉強することを忘れず頑張っております。　それに始終、頭が低く決して出しゃばることなく謙虚な気持ちで人と接する姿を見る度に頭が下がる次第であります。私が幼少の頃、よく祖母の手をわずらわせたものですが、口やかましく叱られることもなかったけれども、私はうなだれておりました。今もこの祖母だけには頭があがらないのです。外見的には老いた祖母でありますが、今をもって気持ちだけは、我々若者よりもナウイのであります。

最近めっきり老いてしまった四年同志よ!!世の元祖老人に負けることなかれ。そして新入生の青二才に負けることなかれ。学生生活は本当に残り少なくなったけれども、気合いを入れて頑張ろうなたア。

〝Ｖｉｖａ、おはっちゃん!!

書道部にはいって

法学部　一年　鷲崎　ゆみ子

「とっても礼儀正しいクラブみたいだなぁ。」これが、福岡大学書道部に対する私の第一印象でした。

私は高校時代にも書道部に入っていましたが、女子ばっかりのクラブだったせいもあってか、先輩と後輩との間での会話も同級生同志の会話とたいして違いがありませんでしたし、挨拶もただ会釈をする程度のものでした。ですからこちらの書道部に入った時のとまどいは、書道そのものを始める以前から、大変大きなものでした。

また、練習面に於いても、今までは出席してもおしゃべりばかりしていて筆をただ持っているというだけで、書道展や揮毫会の直前になってやっとあわてて練習を始めるといった調子でしたから、はじめてクラブに出席してみてとても驚きました。先輩方が一人一人に丁寧に注意をして下さいます。お手本も今までのものとは全然違ったもので、精密さが要求される様です。一つ一つ揚げていくときりがないようですが、やは

ほがらかなあいさつは暮しの潤滑油である。

り一番驚いたことは、練習時間が長いということです。机に向って一時間程度ならば、正座も苦になりませんし、練習も楽しいのですが、時間がたつにつれて、腕と足が疲れてがまんできなくなってしまいます。

のんきな私にとっては厳しいクラブです。人並みについていけるかどうかとても不安ですが、ともかく大学生活の四年間を有意義なものとするために努力していきたいと思っています。

今、思うこと

商学部　三年　鶴岡英子

三月の末、もうじき咲こうと春の息吹きを潜めていた島原城のお堀端の桜。

久し振りに城内経由のバスに乗り、私の目の前に飛び込んできた満開の桜。

今、春風にのって私の肩に舞いおり、散りゆく校庭の桜。

確かに時が流れている。私も自然の為すままに、自分の心に素直に従っていきたい。

以前は何事に対しても自分を純粋にぶっけていき、悩み考え続けていたように思う。しかし、現在の私は素直に心を開き、ぶっかっていっていない。相手の顔色を気にしたり、自分かわいさに思った事を相手に遠慮して言えなかったり。これは相手に対する裏切り行為であると同時に自分に対しての裏切りでもある。

人のことを思いやるということは、本気で自分をぶっけていき、相手を思うことであり、妙な心の詮索や遠慮などを必要としないものだと思う。その人がいやな思いをしないようにとうわべだけにこにこと笑顔でその場をうまく切り抜け、心の中は正反対で言いたい事も言えない。表面上はうまく行っているようでも実は中味のない関係になってしまっている。自分が本気で相手にぶっかっていけば必ず心を開いてくれると信じていきたい。

また人に対して意見や批判をするという事は難しいもので、ただ言ってそれで終るものであるならば簡単でもある。しかし自分が言った言葉により少なくとも相手は悩んだり考えたりするものだから、言った以上は責任を持たなければならない。相手を思う気持ちから出た言葉なら言いっ放しではないはず。しかしただ自分の思いつきだけで相手を批判するのならそんな事はやめてほしい。相手を傷つけることだけに終ってしまい、それ以後の思いやりなど少しもないものだから、私はこれらの事を友達から学んで、単なる自分の不満を相手にぶっける事だけはやめたいと思った。

最近、人間関係の難しさをしみじみと感じる。だからせめて自分の心にだけは正直にありたい。生きているのは他の何者でもない。この私自身なのだから。

―　果てしない大空と広い大地のその中で……
　生きることがつらいとか苦しいだとか言う前に
　野に育つ花ならば力の限り生きてやれ　―

「あとで……」と思う心がついにやれなくしてしまう。

大学とは

経済学部　一年　坪矢一義

入学して、そろそろ一か月になろうとしている。大学生活や寮生活にも慣れ、先輩や友人の名前や顔も覚え、なんとか落ち着いたのだが、今落ち着いて考えてみると、自分はいったいこの大学で何を学ぶために入学したのか、大学とは何なのだろうかという最も重要な問題を忘れていたことに気づく。

〃大学とはこういう所だ。こういうことを学ぶ所だ。〃と定義づけるのは非常に難しいと思う。

大学に於いてのこういったわからない問題や、多くの知らないことを、一人で悩んでも仕方ない。やはり、一人より二人、二人より三人というように、より多くの人達の意見や指導を受けることが必要になってくる。

したがって、大学ではできるだけ多くの人達との交際というものが大切になってくるのではないだろうか。そういった意味から、なにかのサークルに参加することは、大変重要かつ必要なことだと思う。そのサークル活動を通じて先輩や友人との人間関係を深め、お互いを助け合い、理解し合う。これが大学ではないだろうか。また、そういった先輩や友人を自分で見つけること。これが大学ではないだろうか。

今、考えてみると、この書道部に入部したことは大変意義あることだと思っている。これから四年間、寮においても、サークル活動においても、そういった先輩や友人との人間関係というものを大切にして行きたい。

無題

薬学部　三年　藤原弘美

二十才になって、もうじき四ケ月を迎えようとしているけど、まるで二十才になりきれていない私です。

そうした年頃になれは、私だっていつかごく自然に女らしくて物腰の美しい落ち着いた大人の女性になれるような気がしていたものだったけどー。

平然と全てを包み込み、まるで何事もないかのように、常に一定の速さで時が過ぎて行き、私が生まれて二十年も過ぎ去ってしまいました。

思い起してみると、そこにはいろんな出来事があったし、人間なのだからその中での感情の起伏というものは凄まじいものだったと思います。

でもどんなに悲しく思う事があっても、それは全て時が解決してくれ笑って話すことのできる思い出に変えてくれるのだと思います。

それに要する時間は、様々であって、うんと時間を要するものもあるのだけど……。そして、今、私はあまりにも未熟すぎます。過去の反省を全て忘れてしまったみたいに。

でも、きっといつか、心の底から生まれ変われる時を信じて、まわりの人達と一緒に私らしく生きて行きたいな。

あせって一人背伸びしてみたところで時をとび越えられるはずなんてないのだから。そして自己の独自の存在と同時に他者もまた独自の存在なのだからー。

学生生活について

法学部　一年　梅崎孝夫

「大学で何を学ぶべきか。」について人それぞれに色々な考え方があると思いますが、自分は、他人から強いられるのではなく、自ら進んで勉学なりクラブなりに積極的に打ち込む事だと信じています。

まだ入学して二週間余りですが、大学は高校時代の延長ではなくて、自分の足で歩かないことには、人は誰も気使ってくれないことを感じました。

小学校、中学校、高校と習字を習ってきましたが、福岡大学の書道部に入部して新たな気持ちでゼロから出発したいと思います。そして、サークル活動の中で先輩、同輩と付き合うことによって今までの自分と違う自分を発見したいし、学生生活を豊かにして、学生生活を楽しくしていきたいと考えています。また、「人間関係とは何か。」「書道とは何か。」についても一方向だけからの見方にしばられない学び方を書道部の中でじっくり腰をすえて見つめ、数多くの場を踏んで飛躍したいものです。

書道部に入部したからには、四年間努力して自分の腕を磨き、社会に出てからも、良き思い出となるような有意義なものを築けるよう頑張る覚悟です。最後に自分の好きな詩を紹介しておきます。

もう一息

もう一息という処でくたばってはなる
何事もものにならない。

もう一息
それにうちかってもう一息
それにも打ち克って
もう一息

もう一息
もうだめだ
それをもう一息

勝利は大へんだ
だがもう一息

―実篤―

人が一杯、自分一人

法学部　四年　高橋峰生

今、私達は様々な環境に取り囲まれています。その中でも特に身近に感じるのが、やはり家庭や、学校（サークル）ではないかと思います。家庭というものは、私達にとって一番身近に感じるものなのですが、それだから故に皆、安易に過ごしがちなのだと思います。そういう事から私達が肌で感じるものとして一番左右され易いものといえば、次に身近にくるもの、日々の生活の場、私自身を言えばサークルに当てはまると思います。

目がまわれば逆にまわれば直る。死ぬ程の悲しみも別の悲しみで癒る。

サークルと言えは、各々特殊性があり、それを追求していく中で、人間形成を成していく場だと思います。

私も、サークルで四年目を迎えます。その間色々な事がありました。なかなかいい作品が書けずに、何度も何度も先輩に聞きにいった事。訳もわからず怒られた事。親友を見つけた事。兄貴や弟を見つけた事。数えればきりがない程です。

今になって思う事は、〃私は、常々一人でなかったな〃という事です。回りを見渡すといつも沢山の人が渦まいていた様な気がします。だからこそ人間関係というものが大切になってくるものだと思います。

人と人とのつながりは、互いの信頼関係から生まれてくるものだと思います。その為には、大勢の中にいる自分というものをよく知り、そして自分に徹する事だと思います。そのつながりの中で例え信頼関係がくずれていったとしても自分を知りそれに徹しているものは誠意を尽くす事により解消されていくものだと思います。〃人と人とのつながり、大勢の中での自分、一人の自分〃を見直す時が、この学生時代ではないでしょうか……。

青　春

経済学部　二年　濱田清治

青春とは、明るく華やかなものであろうか、それとも陰気な縛られたものであろうか。もっとも、さまざまな青春があろう、それぞれ時に応じ、所に応じて変わってくるだろう。

ともあれ、私はこうして原稿に向かってペンを走らせている。これも又青春の証(あか)しではないだろうか。

大学に入り、書道部に入って早いものでもう一年が過きてしまった。部屋から見える桜を見ると、入学当時のころが鮮やかに浮かんでくるようだ。入部していろんなことを学んだ。楽しいこともあったけれども、又それと反対につらく苦しい事も数多くあった。それに伴ない失敗も又数多くあった。しかしその失敗からのがれようとか、避けようとかは思わない。失敗があると、なぜ失敗したのかを考え、今度からはと思い続けて来た。こうして一年を過ごして来たが、これも、自分の青春である。人から見れば、たわいもないものに見えるかもしれないけれど、この一年は、ほんとうに輝いていたように思える。与えられたものを消化しただけかもしれないけれど又、暗く憂うつな青春だったけれども、やっぱり自分の心の中では輝やいていたようだ。

これから先、まだまだいろいろな事が待ちうけているかもしれない。それは、絶望の底に落されるようなものかもしれない。しかしその時、その所に応じて精一杯できる限りのことはしていこうと思う。自分が何もしなくても、時間だけは流れている。そんな馬鹿なことはできない。又、振り返った時に、精一杯やったという充実感さえあれば、自分の青春は、それで満足できるのではないだろうか。

自己主張

経済学部　四年　桜井　典

自分の道があと少しで決まりそうである。自分の一生を賭けてやれる

嫉妬は男においては弱さであるが女にあつては、一つの強さである。

仕事を持つことができる人は、すばらしいと言う。今、何をすることが一番大切なのか？　生き甲斐とは何だ。書を学ぶ事が好きなのか？字を書くことが好きなのか？皆人とは違った事がやりたい。常に異色でありたい。自己を主張したい。センスをもっている人はすがすがしい。良く見えることが多い。学生時代は自分をじっくり見つめることが重要だ。情熱をもってぶつかれ。強い姿勢を見せろ。強さを表現するには、どうしたらいいのだろう。抽象と現実……。

海はいい。強さを感じさせる。春の海の良さは、自分を暖く包みそうで拒否するところにあるようだ。そこには強烈なイメージがある。雨もいい。潤いがある。情緒がある。何といっても雨は直線である。自分には、そんなに才能はないはずだ。そんなに表現することはできない。自分は、情をもっている。それは、他の者よりも強いと思っている。感情的人間である。表現は自由である。良いものは誰が観ても良いとは限らない。ケチをつけたがる。誰が描いても駄目なものは駄目だ。自分は将来を見つめることが多い。何故か過去を振り返る時は少ない。人並みの人間では駄目だ。人に勝るものを徹底的に磨け。その為の努力は怠らない。全ての力を出して！。思い切りぶつかり、限界まで表現する。字を裸にして姿が消えるぐらいに！。若いんだ。個性を出すことだ。勇気と希望をもって！。線を引く時は、自分が鉄の如く堅くなっている。あらゆる万物をも寄せつけない。自分が若いから荒っぽい作品でいいと思う。野生的感覚で、未完成でいいと思う。筆を手から離す時、自分の弱さを感じる。

力が抜けてふらふらになる。

一年経て

経済学部　二年　桃島文子

学校内を歩いていると「あっ」一年だなあと思える顔、顔。どうして一年とわかるのかしらと考えてみるが、どうしてだかよくわからないけれどもなんとなくわかる。誰か女の子が「あの七号館ってどこですか」と尋ねて急いで駆けて行った。まるで一年前の自分の姿を思い浮かべているようで思わず微笑んでいる自分。一年間の一通りの行事を済ませ、講義にも慣れ、やっと大学における自分なりの時間の過ごし方がわかってきて、一年の時とは、又違った目標が見つかり、ゆとりが出てきたなあと思う今日この頃である。

まだ、学校生活の新鮮さに酔いしれている時はよかったがしだいに目標を失い、時に押し流され、いつの間にか一年間過ぎ去った感じである。

人の世は、喜び勇む日々は幾度となくあろうけれども、それより苦しみ、悩み、嘆く日々の方が、もっと多いような気がする。若き日は若き日なりに。年輪を重ねれば重ねるほどに。

しかし、一刀一刀刻みこまれていく木彫のように、苦しみと悲しみと悩みの一刀一刀が人生に刻みこまれて人の心にしみこむ像が浮かび上がるのなら、苦しみもまたよし、悩みもまたよし。そして悲しみもまた貴重な体験と言えるのではないだろうか。

先日、ふっと目にした次の文章が、おそらくこの先、私の心を占めることになるだろう。

「何もしなければ道に迷わないけど

理想を追う者は足元に気をつけよ。

何もしなければ石になってしまう。」

大学生

商学部　一年　松山理恵

大学生。やっと大学生になれた！そんな気がします。何もかも私にとっては、初めてのことばかりで不安になったり、うれしくなったり、また驚いたりで、家に帰り着くと本当に長い溜息が出てしまいます。これから四年間、自分の力でやっていけるのかどうか、私にもよくわかりません。本当に毎日おどおどして、あせってばかりいます。高校時代とは全く違い、自分から自発的に動いていかなければならないことの大変さ、みんなの中で生活していくことの難しさなど、私にはとても大変なことばかりです。まだまだこれからだというのに、最初からこうでは私自身もたまりません。本当に続けていく自信なんてありません。みんなに追いついていけるかどうかが心配で…。今の私にとっては全てが勉強になります。全く新しい世界に入り込んだようで、すごく毎日がきついけど楽しいです。

これから先、自分がどう変っていくか、自分の気持ちがどう変化していくかがすごく楽しみです。自分を変えるのも自分自身だし、今までとは違う環境で自分を鍛えていきたいと思います。とにかくそれには、みんなに追いつかなければ…。自信なんて全くないけれど、必死でついていかないと私なんか置いていかれそうです。

大学は高校とは違うんだと、実際に感じています。私ももう大学生。ウソみたいだけれど、本当にこの春、大学生になったばかり。もう前とは違う世界、大学という一つの世界に入り、そしてこれから四年間ここで生活していかなければなりません。私自身、どうなるか全くわからないけれども、とにかく一生懸命遅れないように付いて行って、この一年間頑張りたいと思ってます。

振り返りそして

法学部　四年　横山久子

この原稿を書くのも四度目、毎年この時期になると悩み続けて居ます。思い起こすにつけて、三年前。何一つ無知の私。ただ人々の波に押されて通っていた大学というところ、友達が欲しくて、とっさにノックした我書道部のドア。あの頃は何でも新鮮でよかったナー。

二年前、少しわがままが出始め、皆に迷惑をかけてしまった。少々クラブに飽きてきた感じ、でも放れられなかった。不安定な時期。

一年前、何かしら三年目の落ちつき？

私達の時代だという気持ちがちょっぴり生まれ同学年全員はりきっていた。

そして今年、急に忙がしく思われる新学期。この一年、どういう風に過ごしてみようか、どっちにしても後に残っていない唯一の学生生活。慎重にならなくてはと思いながらも、例の如く行き当たりバッタリの悪い性格が又邪魔しそう。

さて来年の今日、私何してるかナ？…

今日なしえることは明日に延ばすことなかれ。

一年間

工学部　二年　床嶋俊一

今の自分を考えてみると、書道部というものが体の一部になったような気がしてならない。何をするにしても書道部が頭の片隅にあるし、もし入っていなかったらこんなに悩むこともなく、毎日がつまらない、だらりとした一年が過ぎていただろう。

去年の今ごろは、大学に入学したという安心感で、ぽっかりと穴のあいたような日々を過ごしていた。クラブに入っているわけでもなく、アルバイトをしているわけでもなく、ただ家と大学の往復だけだった。そんなわけで、五月には、脱力感で一杯になり、そんな大学は本当にいやだと思い、大学に失望して自殺する人の気持ちがわかったような気がした。

そんな時、竹本と知り合い書道部に入部することになったが、途中から入ったということで、先輩又同輩の中に溶け込むことができなかった。そうこうしているうちに、書道部の初めての行事の夏季合宿、十月の揮毫大会、七隈祭、春季合宿又連盟の行事である連盟展、錬成会、秋季総会と参加し、高校中学の時とは違う規模の大きさ、又自分達だけの力でやるということに驚くと同時に、自分達がやらなければ他の人は誰もやってくれないということがわかった。そしてその後のコンパ、打ち上げなどにしても初めての経験ばかりで、それらはすばらしく非常に勉強になった。

他のこともいろいろあったが、この一年間は、楽しいこともつらいこともたくさん経験したが、そしてそれと同時にやり残したことも多く、後悔の念でいっぱいだ。二年になったら一年以上に忙しいが、勉強やクラブ又他のことにも後悔のないよう過ごしていこう。

俺の油山…完結編

工学部　四年　森田健二

拝啓　風薫る五月、新入生を迎え部員の皆様に於かれましては、益々御清勝の事と、慶賀至極に存じ上げます。

さて、小生の過ごせし書道部は、楽しく、寂しく、嬉しく、怒れる、哀しく、笑れる場でありました。部員諸君らと過ごせし日々は、小生にとって思い出さない時がないことを信じます。書技の向上と人間形成、部員による相互批判、相互理解、書道文化の普及を掲げた我がクラブに於いて、諸君らも、人の事とせず、自らの事として従事して欲しいと思います。そして時は去りゆくとも、書道部に於いて青春のロマンを求める事は不変であり、願わくば、人の心に我は住めない事かと悩み、探索して欲しいと思います。

自らの求める道は、自らが追究するもの。その暗夜の道に於いて足元を照らす先輩であり、また、学べる後輩であって欲しいと思います。

右、略義ながら、今の小生の心境を綴ってまいりました。小生の油山は今、最後の春を迎え、最後の四季を繰り広げようと、目前に聳えております。

宜しく御願い申し上げます。

敬具

虚栄心は、それが満たされた時でなければ道理をききわけない。

今、思うに…

工学部　三年　中村和美

今、季節は春！

咲き乱れている桜の花が、風に吹かれて散るのを見ると、心許無しか淋しさを感じる季節、春！

でも、私は春が好きだ。何もかもが新鮮で自分の心までが、清められるようで…。

それでいて、皆の顔が「さあ、やるぞ。」という意欲で輝いている。心身ともにエネルギッシュできれいである。何だか、私まで、うれしくなる。

また、何もわからず、キャンパスを右往左往している一年生。不安を隠しきれず、おろおろしている一年生。つい、手を差し延べてやりたくなる一年生。でも、彼らには活気がある。彼らの目はすべて吸収してやろうと輝いている。生き生きとして、きれいである。

思うに、何かを夢中でやっている姿は、端から見てとても美しい。私は、その美しさを素直に感じとることのできる人間になりたい。そういう人は、とてもあったかい。人間味あふれる人だと思う。自分の感情を時として押さえる事は大切である。でも、本当に心から、すべてを喜び、悲しみ、憎む事ができればいいなあって、思うこの頃。

今までの私は、他人に自分を見透かされたくなくて、回りをベールで取り囲んでいた。それが、書道部に入って、はや一年。その間で私という一個の人間が、対話というものを通じて大きく人間的に成長したと、素直に思いたい。

私は無器用でもいい。世渡りが下手でもいい。思いやりのある、人の心を持った人間になりたい！

小さなメッセージ

商学部　四年　八谷俊彦

萌え立つ緑がまぶしいくらいに輝き、爽やかな五月の風が吹く。来ては去り行く季節。流れては消え行く時間。ツツジは藤へ、そして菖蒲へと季節の花と言わず、全ては流転し留まることは無い。

大学生活の精算の年を迎え、今では、様々な先輩方の人間像が心の中で生き続いているように、己自身もそうでありたいと思う。書道部との出合いは、多くの人との出会いを生み、そして数えきれない程の思い出が心に宿った。時間は流れ去り行くものであるが、数多い人との出会いから自他共に錬磨した時間の帯は、心の中で力強く今尚、生きづいている。

自分に気づかないまま、そして青春をつかもうとしないままに、淡い陽の光ばかりに気を取られ停止していた時間。しかし心のどこかで、スリリングな大学生活を送りたいと欲していた昔の自分を今では、不思議と安心して振り返ることが出来る。

「自己形成」「自己錬磨」とは言っても、それは自他共存の中で行なえるものである。先輩、後輩、同輩、そして困難に力ち向う自己の強い意志が己自身を鍛うことになるのであろう。

全ては流転している。時間も事物も。全てに目を見開き、感受しなけ

出る月を待つべし。散る花を追うことなかれ。

れば、何一つ心に留まることはない。
新入生諸君！今は手さぐりの状態でもひたむきに行なうことが今後の自己形成のベースになるものと思う。

期待する四年後の自分

商学部　一年　志岐直樹

書道部に入部して、やっと一週間過ぎたばかりというのに、先輩たちをずっと以前から知っていたようだと時々感ずることがある。
何故だろうと考えてみると、およその見当がつく、入部してからの一週間は、まさに一年間の出来事が一度に集約されたような貴重な期間だった。初めて練習に行った時には、先輩たちの真剣なまなざしと礼儀正しさに感心し、これからの四年間を先輩たちと共に過ごせるのだろうかと不安に思ったりしたが、練習中には、うまく書けないで困っていると、一緒に筆を握って悪い所をてほどきして下さったり、練習が終ると一緒に帰ったりした。こんなに先輩たちに親切にしてもらったのは初めての経験であったと思う。
先日、先輩が、残り少ない年月を残念がっておられるのを偶然耳にしたが、先輩には過ぎ去った日々が楽しい事ばかりではなく、むしろ苦しい事が多かったのかもしれない。自分も、この四年間を有意義に過ごしたい。その為には、大学という、ある意味では、枠のない、自己を磨くには持って来いの場を書道を通して自己を見つめ直し、四年後には何段階も飛躍した自分を期待する。
しかし、この巨大な壁を一人で乗り切れるかどうか。時には先輩の手ほどきを必要として相談するかもしれませんが、自分でやれる限界にさしかかるまでは、目をつぶて見ていて下さい。やったるぞーッ！

人と接する時に

薬学部　二年　佐藤朋子

人間は本能だけで生きる動物ではない。一人前の人間となるには、多くのものを学ばなければならない。その為に多くの人間と接することが必要だと言う。
コンクリートの箱の中で生活する。昔からすれば異様な事態、合理性が重視され、一切の行動が損徳感情で決定されようとする時に、自然な感情などというものはほとんど顧みられない。
未知の人々と出会うことの喜びよりも、むしろささいな人間同志のもつれから傷つくことを怖れてしまう。多くの人と接することによって、つかみとっていく自然の感情というものをどこで学んだらいいのか。
知識だけにこりかたまった、機械みたいな冷たい人間や、他人を蹴落とすことしか考えないエゴイスト、やたら疑い深く、そのくせ平気で人を騙す人間、生きる気力のない人間、何もかもを冷笑する人間、いつの間にかそんな人間に。自分がなっていそうで恐くなってしまう。
人と話す場合、人の話を聞く場合、たとえそれがたわいない話だとしても、相手の性格、考えは自然と出てくるもので、それを自分がどういう受け止め方をするかが難しく、つい相手の態度、話をいやらしい、醜悪なものとして、自分の考えで変えてしまったりしてしまう。
ただ、人間と人間との間に、どうしても超えられない溝があり、言葉

絶望とは、愚者の結論である。

では埋め尽くせない遠い隔たりがあるのかもしれない。けれども人と接する時、謙虚さと、慇懃(インギン)や卑屈さがどうちがうのかということを身をもって表現できる人になりたいと思う。

徒然なるままに

法学部　四年　村瀬和美

すっかり初夏の感じ、私の好きな季節です。
本当、早いものですネ。
何がって、この私が　もう四年生っていう事がですヨ。
信じられないなあ。

右手に筆を取り、白い紙に向かって、思うままに筆を進める。

今までの三年間、いつも過去を振り返り振り返りきたみたい。
振り返ってみて、悔やむ事の多い私だから
振り返らずに　歩いていきたい。
例え、今　涙したとしても
次の瞬間には、微笑みたい。
そう思うんです。

平凡な言葉だけど
情熱と、勇気と、努力を惜しまず。そして優しさと、真心こめた思いやりを大切に、明日へと生きていきたい。

今の私の心は、透明な水色。

学生生活あと一年
これからの一年、どんなことが起こるのかしら……。

思いやり

法学部　三年　松尾幹雄

先日、あるOBから「書道部員の心が、氷のように冷えきっている。」と言われた。それを聞き、僕自身全くその通りだと思った。例えば、書道部内での縦、横のつながり、人間的な付き合いとか、相手の気持を思いやるというのがあまりにも無さすぎるのではないだろうか。それが故に暖かみのある人間関係というものが出来ないのではないだろうか。

それとは別に、純粋な心と心のつながりを持ちたいと思っても、相手の〃自己〃というものが強すぎると純粋さが無くなり、自己というものを繰り返されるのをとても冷たく感じるのである。人間的に生きて行く上で自己主張というものが、当然必要となってくる事があると思うが、自己主張する以前に自己主張する事によって、相手の気持ち、また集団というものはどのようになるものかという事を思いやる心を持ち、主張してもらいたいと思う。

このような心の思いやりというものがあってこそ信頼、協調性、親友という本当の暖かみのある心と心の絆になるのではあるまいか。これからの書道部員同志の心に、このような絆の網の目のようにめぐらされる

汝の心の庭に忍耐を植えよ、その根は苦しくともその実は甘い。

ことを強く望む。

「大学生活について」

経済学部　四年　明神唯司

現在私も大学四年、クラブに於いては最高学年としてその立場も保障されている訳であるが、そういう立場にある自分を新ためて見つめ直した場合、はたして現在の自分がクラブにおいてその様な優遇された立場に甘んじてよいものだろうかと思う。またクラブにとどまらず自分自身の事を考えた場合でも、持ち得る可能性を十分に発揮すべく真剣に取りくんできた時が、三年間の内でどの程度あったであろうか。

そもそも大学とは、一般に最高の学術を授け、研究する所として、また立派な人格者を養成する所として社会に位置づけられるものであるが私達にとっての大学四年間は、社会に出る為の広い意味での基礎準備期間としてさまざまな選択を強いられるべき期間であり、現在の様に真なるものが見失しなわれがちな、また多様な価値感によって形づくられた社会にあっては、自分のとるべき道という事を考えた場合、その決断がにぶる事が多々あるものである。しかしそれらの思考を繰り返し、また小決断を行なう場をサークルに求めた自分にとっては、現在までの三年間は、決して無駄な時間ではなく、サークルは自分の将来を決定すべく種々の精神的な方向づけをさせてくれた所であり、今後もこのサークルで培われた、純粋に物事を考え判断する力は必ず自分自身の精神的な基盤として、役立つものと思う。そしてその事は、社会で一般に高く評価されるうすっぺらな肩書きよりもはるかに重みのあるものと思う。

目を大きく開き、前進あるのみ!!

心頭を滅却すれば火もまた涼し。

部員の一言

経済学部一年　江里口　吉　光

字も全く下手な私ですが、一年後には、なんとか見られるまでに、頑張ります。

法学部一年　柴　田　直　人

落ち着きのない堅物的な性格をサークル活動と大学生活を通して、変えていきたいと思っています。

経済学部一年　梅　崎　孝　夫

自分は、書道部に入部したからには、四年間続ける覚悟です。サークル活動の中で自己を鍛え、人間形成に役立てたいと思います。

経済学部一年　小田部　二三典

これからの四年間、自分なりに頑張りたい。まず、自分のやらなければならないことを把握して、部員としての自覚を持ちたい。

工学部一年　山　城　邦　敬

礼儀を身につけて、規律正しい生活を身につけて二年になっても、恥をかかないように努力する。

法学部一年　坪　矢　一　義

〃字を書く〃という事は、一生必要であるから、これから四年間、真面目に部活動をやって是非、うまくなりたい。

商学部一年　志　岐　直　樹

自分は、今書道部に入って間もない頃の字を見てみたいと思う。明らかに現在の字とは違っているからだ。これからも、いい意味で字が変わっていくのが楽しみだ。

経済学部一年　萩　田　広　文

今の自分、今の時間を大切にして、悔いのないよう力一杯生きていこうと思う。又、根性ある人間になりたい。

経済学部一年　中　村　純一郎

これだけは、誰にも負けないと言えるものをつかみたい、自分をじっくりみつめ、学問、書道、その他に励みたい。

法学部一年　簑　原　千　枝

四年間クラブを続けて、充実した大学生活を送りたいです。そして、少しでも、クラブの役に立ちたいです。

法学部一年　平　田　経　子

他の大学の書道部の人達とも交流を深めたい。またなるべく練習には顔を出して、少しでも字を上達させたい。

人間にとつて、苦悩に負けることは恥辱ではない。むしろ快楽に負けることこそ恥辱である。

商学部一年　松山理恵

字を上手に書けるようになりたいし、書道を通して、いろんな事を勉強したいです。

商学部一年　高橋福代

四年間頑張りますので、よろしくお願いします。

工学部一年　西口公恵

まず書道のおもしろさ、すばらしさを感じられるようになり、字がうまく書けるようになりたい。

商学部一年　高杉素子

きれいな字が書けるように、精神的にも、落ち着いて書道を理解していけるようになりたい。

法学部一年　川嶋ゆかり

書道というものを、一日も早く身につけ、人間的にも大きく成長するように、頑張りたいと思います。

商学部一年　二村暁美

自分自身の字を見つけるために、くじけることなく最後まで精一杯頑張りたいと思います。

法学部一年　鷲崎ゆみ子

書道部に、入ったからには、やはり字をうまく書けるようになりたい。早くクラブの雰囲気になれて、練習にはげみたい。

経済学部二年　桑波田景成

何をやるにしても、真剣勝負、自己に甘さは許されない。夢を追い続けるのもいいが、これからはもっと広い視野で自己を見つめ、前進しなくてはならないと思う。

商学部二年　丸田俊和

新二年になって、今、呉昌碩を書いています。今年中には一応呉昌碩とわかるような字を書きたいと思います。

工学部二年　石原透

書道の上達を願うのと同時に、けじめや礼儀も身につけていき二年生として、恥ずかしくないようにやっていきたい。

工学部二年　覚文博

二年生であるので一年生に負けないように、頑張らなければならない。スランプに落ち込むこともあるので、覚悟して練習に励んでいきたい。

人事を尽して、天命を待つ。

工学部二年　床嶋俊一

趣味スポーツ、八十年代を生きぬく為に、必要な気迫、勇気をもって全てにアタック！

法学部二年　城戸信比古

編集委員として連盟役員として、苦しくつらい思い出はあっても、決して悔いる事の無いように頑張るんだ！

工学部二年　佐藤達也

何事も、基礎を固めて置く事が大切であり、その段階で挫りては何もならないと思うので、この一年勉強共々、一生懸命頑張りたい。

経済学部二年　濱田清治

二年生という自覚と認識を持って、入部当時のあの情熱を忘れずに、三年間を悔いの残らないように送りたい。

薬学部二年　天野仁子

一日に一回、感激、感動して若さを保ちたい。

法学部二年　崎坂真弓

私の好きな言葉〝思いやり〟をいつも忘れずに、頑張っていきたいと思っています。よろしくお願いします。

人文学部二年　野村敬子

もっと自分をつなぎとめて、自分の中で部の中でやって行きたいと思います。大学卒業後の自分を考え、学生生活を過ごさなければいけないと、最近つくづく思います。

人文学部二年　手島玲子

常に、自分を鋭く見つめて甘えをなくしていきたい。そして、何よりも第一に、行動していきたい。

薬学部二年　佐藤朋子

自分の行動が、他人への思惑の為に引きずられる…。そんなことのないように、心を配りたいと思います。

人文学部二年　渡辺泰子

良く食べ、良く遊び、良く学び、素直な気持を忘れずに教養豊かな人間に成長したいと思う。

人文学部二年　児玉富美

今、いろんな事に興味を抱き、すぐに首を突っ込みたがる人一倍好奇心旺盛な私です。もっと大きくなりたくて。

人文学部二年　和田直子

何をするにしても、計画を立て時間に追われないように、毎日を過ごすというのがこの一年間の抱負だ。

大胆、また大胆、そして常に大胆。

工学部二年　横山佳代子

五十音の最初の二文字は、とっても大切なものだから……。この二文字で全てみつめていきたい。頑張るゾー！

理学部二年　松藤美津子

悔いのないように、充実した日々を送ることを心掛けたいと思います。

経済学部二年　桃島文子

暗中模索だった去年に比べてもっと日々の生活にゆとりをもって、目標に向かって前進したい。

工学部三年　佐藤雅・秋

今年は、気持を新たにクラブ、講義に精を出し、多くの人とつきあって行きたい。

経済学部三年　酒井昌弘

今年一年、今一度己をみつめ己のもてる能力を最大限に発揮したい。何事にも大きな夢をもち、ぶち当たろう。

経済学部三年　大家一之

書道部に入部して、もう三年目、残りわずかな時間を、思い切り楽しもうと思う。こうしているうちにも、時間が過ぎて行く……。

和洋酒類
石橋酒店
福岡市中央区六本松4－9－36
TEL (741)－7578

コーヒー＆パブ コロボックル
福岡市西区片江1689－7
TEL 801－7000

気になる髪の為今お手入れ時
あっぷる
（七隈店）　西区七隈4丁目5－8 TEL801－2544
（長尾店）　西区長尾3丁目9－7 TEL511－4291

天才とは強烈なる忍耐者である。

経済学部三年　重松裕人

現在、倪元璐を書いています。今年は、これと黄山谷をアレンジした様な創作に、挑戦しようと思っています。

理学部三年　十代田雄治郎

腹がふとい分、これからも太っ腹の精神でやりぬくゾー。

法学部三年　鶴田定司

もう大学生活も、折返し点を過ぎたが、ゴールを目指して突走りたい。

経済学部三年　浦泰介

書道部生活三年目を迎え、今迄以上に自分自身を部活動に熱中且つ集中し、一年間を又一秒を自分が満足できる時間に、していきたい。

法学部三年　松尾幹雄

残りわずかな大学生活の中で、何事にもチャレンジ精神で、常に燃え尽くことのできる男でありたい。

商学部三年　原口豊子

抱負といって特別ないけどまあ、今年くらいは女らしくなりたいと思います。

薬学部三年　藤原弘美

もっともっと、もーっと強くなりたい。

商学部三年　成田睦子

サンサンと輝く太陽の光を浴びる熱帯植物のように、情熱的に強く生きたい。

商学部三年　鶴岡英子

書道向上を、第一の目標として、思いやりを根底に持ち、縦、横のつながり（特に女子）を大切にしていきたい。

人文学部三年　三小田生子

ボーッと過ごした大学生活の半分……。

そろそろ、ばんかい態勢に入ろうかとぼちぼち思い始めています。

工学部三年　中村和美

今年こそは、自分に会った書を見つけたいと思う。又、暇があればいつも筆を握っている状態にしたい。

経済学部四年　明神唯司

今年こそ、〃ドッシリ〃落ちついた男になりたい。

経済学部四年　原田明

海底の魚が最後に気づくのが、水であるという。魚は、水の中にある様々なものの存在を、知っているが、水だけは、気づかない。今、この時、この水を見つめていかねば。

嵩高と滑稽の間は一歩しかない。

経済学部四年　桜井　典

書道に生き甲斐を、感じています。

商学部四年　桑原　淳一

自己の存在価値が気になるうちは、大きな人間になれないような気がします。

商学部四年　田中　孝路

早くも、部室から見える桜の木は、四度目の葉桜となり、学生生活残すところ、数ヶ月となりました。頑張ります。

法学部四年　高橋　峰生

〃四年間〃を意義あるものにする為に、この一年間を精一杯頑張ろうと思っています。後輩諸君、後に続け！

工学部四年　森田　健二

大学天国最後の年。体を錬え、心を磨き、男道をさすらい歩きます。

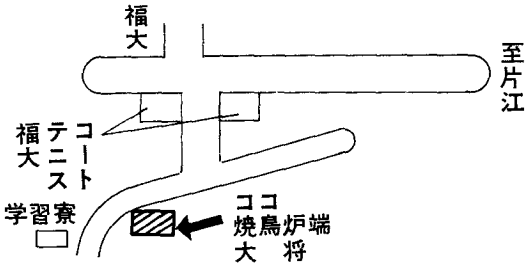
法学部四年　久保山　豪

一冊の充足感、この青春時代の充足感を勝ち取る為にも、疲れ目にも〃スキッ〃と、目薬をさして頑張ります。（小憎其の四！）

工学部四年　島村　友博

自分に若さがある限り、波瀾万丈の生活を送りたい。

焼鳥、炉端
大　将
西区大字片江倉瀬戸129－5
TEL　863－9958



パーマ＆カットきもの着付
ヒロ　ビューティサロン
西区七隈4丁目20　TEL862－3488

つくって売る店　高級寝具専門店
田中ふとん店
六本松大通りバス停前　☎741-4786・731-0858

うそつきは本当のことを言う場合も信じられない。

商学部四年　八谷俊彦

学生生活も余すところわずかとなり、最後まで、スリリングに送りたい。

法学部四年　上田信一郎

〝己の欲せざる所は、人に施すことなかれ〟〝己に克ち礼に復る〟

本当の人間と人間とのふれ合いを求めて共に歩もう。

経済学部四年　松永義城

最後の学年を迎えて、思い残すこともたくさんあるが、ラスト一年書道部で、思いっきりエンジョイしたいと思う。

商学部四年　吉富りえ子

あれよあれよという間に、三つ下の後輩ができるようになりました。うれしいような、年をとったような、書道部みな姉妹頑張ろー。仲良くしてね。花の四年でした。

商学部四年　原千尋

ぼんやりしていたら、もう四年になってしまいました。おばさん扱いされないようにと、はりきっているんですよ、これでも。みなさまがた、よろしくね。

商学部四年　扇寿美子

コーヒーと共に迎える朝、お湯を含んで、徐々にふくらんでくる、粉を見つめながら、一日のプランを心静かに立てていきたい。

経済学部四年　福田美由紀

ホットチョコレートのように甘く、熱く、そして限りなくやさしさを秘めていきたい。

法学部四年　横山久子

私がこよなく愛する物、にがいコーヒー、初夏の風、音楽、冬の想い出、しんちゃんetc……。

これだけでは、わからないと思うけど、その内には、よろしく、お願いしまあす。

法学部四年　村瀬和美

いよいよ四年、最終学年です。残りわずか、一年ですから、私なりの生活をしたい。そして、みんなと仲良く過ごしたいと思っております。

理学部四年　郡硅子

最後の学生生活。一年間なんでも見てやろう。やってやろう。

信念は嘘よりも危険な真理の敵である。

書道研究

―王　鐸―

一、生いたち

一五九二年河南省孟津に王鐸という人がいました。彼は覚斯と呼ばれ、三十才の時に大学を卒業し進士となりました。四十六才で侍班に任ぜられました。五十二才で礼部尚書つまり文部大臣に任ぜられました。

二、何故あなたは郷里へ行くの

礼部尚書になったのに都にいず郷里に帰っていたのです。

☆「政府の高官が病気でもないのに郷里に帰っているとは何事だ。都をあけてる間に明は滅んだのだ。」と某作品に書いてあります。彼は侍班になってから礼部尚書になる間に休暇をとって郷里に帰っています。

☆「鬼様は明の運命を見限ったのだろう。弱虫め。」と言ったのですが王鐸はその場では何も言わなかったのであるが、友人にはこの様に言ったそうです。「暴動で自分の郷里が不隠になったから様子を見に行った」

三、郷に入っては郷に従え

彼は礼部尚書になったもののまだ北京に行って任官しないうちに明は滅びたのです。降伏した王鐸は北京に連れていかれ明史副総裁に任ぜられました。王鐸はそういう清朝の政策の中で順調に出世し、多少のつまずきはあったものの礼部尚書になったのであります。

四、時の過ぎゆくままに

王鐸は明朝でも礼部尚書に任ぜられたのですが、辞令だけで就任しないうちに明は滅びてしまったのです。次に彼を礼部尚書にしたのは異民族の清朝であったのです。しかし、この時も病気で郷里に帰っていたので結局礼部尚書の仕事をしないうちに死んだという事です。

三月、郷里で病没し、時に六十一才でした。

希望は目ざめた人の見る夢にすぎない。

何紹基

何紹基は、字は子貞、東州、蝯叟と号した。嘉慶四年（一七九九）に湖南省道州で生まれ、父は浚漢といい、双生児として生まれた。弟の紹業がおり、その下に紹祺、紹京の二弟があった。家は代々、書香の家柄であったらしく、父の浚漢は戸部尚書、贈太子太保にまで至った人であり、大変めぐまれた環境に育ったわけである。

少年期から青年期にかけての何紹基は詩を作ることを好み、陶淵明、韓退之、蘇東坡の三家の詩を好んで学んだという。そして、その後、経学、史学、説文考訂の研究もするようになった。

何紹基が書をよくしたのは、血筋の様なものであったらしく、弟の紹業、紹祺、紹京とも書が巧みで、世に何氏四傑と称せられた程であった。

二十才になり結婚して、二十三才で一子をもうけてからの何紹基は、包世臣蔣伯生などと交わり、銘の研究や碑を談じたりした。碑文の拓本なども収集したらしく、中での自慢は北魏「張黒女墓誌銘」の旧拓本を手に入れた事の様である。又、鎮江の焦山で雪を冒して「瘞鶴銘」を手拓したり、蘇州で「大字麻姑仙壇記」の宋拓本を入手したりしている。

この間、何紹基は、再々、郷試を受けたが何度も落第した。しかし、意気消沈する事もなく、焦躁したりもしなかった。又、後にも免官されたときも、あっている様なところをみると、何紹基という人は、出世欲とか、物欲などの世俗的欲望に恬淡な人であった様である。

その後、ようやく郷試の試験にも合格し、あらゆる仕事を手がける様になり、一般行政まで行なう様になった。しかし、これが原因で他官吏の反感をかい、免官されてしまった。歳五十七才であった。

そして、何紹基は、諸処に碑を訪ねたり、拓本を集めたり、詩を作ったりして過ごし、又旅の途中、書を売って歩いたりもした。その家刻の「東州草堂詩鈔」を出したり、蘇州書局及び、揚州書局に依頼され「十三経注流」の刊行を指導したりした。何紹基は、こうして蘇州と揚州を行来するうちに、同治十二（一八七三）年、痢病の為没した。

何紹基は二十才頃から真剣に書を習い始めたらしく、「書林藻鑑」には彼は若い頃、楷書は蘭台の道因碑を臨書し、行書は魯公の争座位帖、裴将軍詩を臨書して、駿発雄強でとどまるところは極めて少ないと書かれてある。

彼ははじめ、顔法に強い関心を持っており、中年になって北碑を習い、晩年に漢碑に熱中するが、それでも顔法が基礎となり、顔法北碑の峻厳さが加わり、また漢隷の古厚さが加わって、次第に老熟した彼独自の妙趣ある筆致となるのである。

何紹基の書は「微弱な力の変化」が大切にされている。ダイナミックデリケート、この相反する情が見事に呼吸を合せた時、気品、情意、生命力に満ち、時の流れにも新鮮さを失わぬ作が生まれ、また確実大胆な紙面のキャッチと、末筆、転折の毛先一本まで把えこんでしまおうとする気配が感じられる。

不幸に堪えないほどの大きな不幸はない。

――蘭亭序――

一、蘭亭の会

東晋の永和九年（三五三年）三月三日に会稽郡山　県西南二十里あまりに位置する名勝地蘭亭に右軍将軍会稽内史王羲之の呼びかけによって、当地の名士達が集まった。参集したのは羲之の子の玄子・凝子・渙子・徽之・献之達の他、彼の友人又、属僚達凡十二名にのぼる盛会であった。集まった人々はおもいおもいに座をしめ、水面を流れ下って来る觴を手にすくって自作の詩を朗詠する。もし詩を賦しえぬものは、罰として大杯につがれた三斗の酒をほさねばならないさだめであった。いわゆる曲水流觴の宴である。

蘭亭の会において罰杯をうけた十五人をのぞくと四言詩と五言詩それぞれ一首あわせて二首をもしたのは羲之はじめ十一人、いずれか一首をもしたのは十六人であった。羲之以下二十七名の作品は「蘭亭集」の名のもとに一本にまとめられ羲之の前序と孫綽の後序がつけくわえられたが、その羲之の前序こそ「蘭亭序」と呼ばれるものである。それも蘭亭会に於いて興のおもむくままに筆と紙をとりよせて書かれたのであった。一気呵成に書き上げられたもので、二十八行三百二十四字からなり、同じ文字、たとえば二十数字にわたって使われる「之」の字でさえ、どれをとりあげて見ても運筆を同じくするものはない。真に快心の作品であった。宴がはて、酒がさめてから数十回数百回となく浄書をくり返したが、どれも最初のもののできばえにおよばなかった。

二、だましとられた「蘭亭序」

太宗は羲之の書を愛した。立派なコレクションを持ちながらどうしても「蘭亭序」がほしかったので八方手をつくしてそのゆくえをさぐらさせた。それが越州永欣寺の弁才禅師の手元にあるらしいという消息をつかんだので監察御史の蕭翼をさしむけた彼は商人のふりをして弁才に近づき、仲良くなり、「蘭亭序」を見せてもらった。ある日弁才がいないのを知って忘れ物をしたと言って寺にはいり「蘭亭序」を盗んで来た。

三、蘭亭序のゆくえ

蘭亭序は梁末の戦乱の際にゆくえ知れずになってしまった。ところが陳の世になって僧永が再び手に入れ陳の宣帝に献上した。（蘭亭記）その後何者かが　軍の総司令官晋王楊広、即ち後の隋の煬帝に献上したが　広はそれを顧みなかった。そのうち僧果が死に弟子の僧弁に伝えられた。その後もずっと手元においた。そして僧果が借りうけて摹本を作り、一方唐の太宗が秦王と呼ばれた頃「蘭亭序」の摹本を目にしてすっかりその虜（とりこ）になった。ぜひ真蹟を手に入れたいものだと念願し続けていた。僧弁の所にあると聞いて蕭翼を越州につかわし、武徳四年（六二一年）秦王の所有に帰することとなった。

真蹟を手に入れた太宗は宮庭、搨書人の趙模、韓道政馮承素、諸葛貞ら四人に命じて数本を搨摹させた。これらは皇太子はじめ貴族や近臣に下賜された。やがて六四九年（貞観二三年）長安の北方坊州宜君県において病に臥した王華宮の含風殿で臨終をむかえた太宗は皇太子の李治即ち後の高宗を枕元にまねいて「蘭亭をよみじへの旅につれてゆきたい」と言い、そして蘭亭序の真蹟は地上から姿を消した。

あまり多くを約束する者、あまり多くを期待する者は両者とも身をそこなう。

二、生いたち

彼は、明萬暦三五（一六〇七）年に、山西省大原府で生まれました。代々学者の家柄に育った彼は、そのおいたちにおいて、受けた影響はかなり大きいものでしょう。

彼の名は、県臣でのち山と改め、字は青竹のち青主と改めました。号は極めて多く、薔虜、石道人の他に二十余りもあり、苦酒を好んだので老棗禅と称したり、道家の法を還湯真人に受けたので真人と称しました。

リスドオール長尾店

福岡市西区大字片江神松寺1689－7
営業時間　午前5時～午後9時30分

塩　川　酒　店

福岡市西区大字片江字何町1119番地5
北片江バス停横　ＴＥＬ 861－6082

過ぎたるは猶及ばざるがごとし。

中国書道史年表

時代	人名	碑帖名	解説	備考
商	伏羲	八卦（八種の符号）	文字の起源	
殷		甲骨文字 金文	殷墟から出土 銅器に刻された銘文のこと（絵画的性格）	古文の時代
周	史ちゅう 長沙	石鼓文	中国最古の刻石 書体 → 大篆 竹簡と帛書	
秦	始皇帝 李斯 程○ 王次仲	権量銘 泰山刻石 瑯邪台刻名	書体 → 小篆＝大篆を簡略化したもの 小篆 八分＝小篆を隷書化したもの	古文の廃止 文字の統一 筆の発明 （蒙恬）
前漢		魯霊光殿壮刻石 魯孝王刻名 太始元年十二月簡 五鳳元年十月簡 大初三年簡 元康三年十月簡 天漢三年十月簡 初元四年二月簡	篆書に近い 隷書の最古作品 古隷（木簡）＝ 〃 八分 〃 草隷 〃	隷書の成立 篆書の簡略体 長さ23cm～巾1cm 現在五百簡以上
新		莱子観刻石	古隷	
後漢	桓帝	開通褒斜道刻石 大吉山買地記 乙瑛碑	力量感有り 漢隷中好作品	紙の発明 （蔡倫）

漢	蔡邕	熹平石経	百数十石
		司隷校尉楊淮表紀	二十行、行四十五字
		郃陽令曹全碑	漢隷の代表的作品
後	王升	白石神君碑	波勢長く美麗
		司隷校尉楊孟文右門頌	構成ややたて長 風格にやや劣 ゆるやかな波勢
蜀	諸葛亮		
魏	鍾繇	宣示表	楷書、八分、行書の三体を善くしたと伝えられる
		薦季直表	
		力命表	
		墓田丙舎帖	
呉	皇象	急就章	草草
晋	索靖	月儀帖	西晋、章草
		出師頌	
西晋		諸仏要集経	西晋写経
晋	衛夫人	平復帖	真蹟本として価値高
	李柏	尺牘	羲之の師という 当時の書風研究上重要な作品
東晋	王羲之	〔行書〕蘭亭叙	欧陽詢、虞世南、循
		集字聖教序	
		〔草書〕十七帖	草書の典型 羲之の書簡集

三国時代〜西晋（新書体の胎動）

隷書より楷書の時代へ

楷・行・草発芽の時代

書道史上重要な時代

あまり他人の同情を求めると軽蔑という景品がついて来る。

晋 東		喪乱帖		書風が南北によって異なる
		孔侍帖	（楷書）	（北方）碑・造像 墓誌等 楷書発達
		楽毅論・東方朔画讃・黄庭経	現代までの通説であるが実証すべき資料はない	
	王献之（羲之の第七子）	洛神十三帖	真偽不明	（南方）建碑禁止 法帖多し 行書の発達
		中秋帖		
		廿九日帖		
		辞中令帖	東晋	
宋	羊欣	占来能書人名	宋 王献之に学ぶ	
	孔琳之		〃 〃	
	肅思語		〃 羊欣に学ぶ	
	薄紹之		〃 羊欣らと献之に学ぶ	
		中岳霊廟碑	北魏	北魏 仏教文化興る造像写経等流行
		牛橛造像記	← 龍門造像	
		元詳 〃		
		魏霊 〃		
		楊大眼 〃		
		鄭長猷 〃		
	蕭顕慶	係秋生造像記	〃 〃	
	朱義章	始平公造像記	〃 〃	
斉	王遠	石門銘	〃 （摩崖）	〃 自然の岩面に刻字したもの
	鄭道昭	鄭羲下碑	〃 六朝北派の代表者	
		雲峯山右閣題寺	〃 （摩崖）	
		司馬昞妻孟敬訓墓誌	〃 司馬昞、司馬紹	
			〃 司馬昇と共に四墓誌	

斉	王僧虔	崔敬邕墓誌銘 張猛龍碑 高貞碑 張黒女墓誌銘 論書 能書人名十二巻	〔北魏〕 ← 〔斉〕
梁	陶弘景 武帝	瘞鶴銘 儒仏等の註釈二百巻 通史・金海 敬子君碑	〔梁〕 文字の八反と称せられる 〔東魏〕
陳	鄭述祖 王子椿 趙文淵	菩薩處胎経 天柱山銘 夫子廟堂碑 重登雲峯山記 泰山金剛経 徨徠山映仙巖 西嶽華山神廟	〔西魏〕 西魏の書風を代表 〔北育〕 （摩崖） 〔北周〕
陳	智永 張公禮・丁道護 智果	真草千文字 草書七種 龍蔵寺碑 美人董氏墓誌 啓法寺碑 蘇孝慈墓誌	羲之七世の孫 隋の墓誌上第一の作 隋の新書風 欧陽詢の先駆といわれる 智永に学ぶ
			法帖とは 法書（手本）の帖の意味で板や石に刻した手本 仏教伝来 （五五二年） 六朝より唐へ書風の移り変わる時代

過去を顧みるなかれ、現在を頼め、さらに雄々しく未来を迎えよ。

唐初	大宗	真蹟数百巻		天性書を好む
	虞世南(※)	孔子廟堂碑		不世出の英雄
		汝南公王墓誌銘		書品が高い
		破邪論序		
		積時帖		
	王陽詢(※)	九成宮醴泉銘	(七十六歳の書)	ひどく醜い大男
		皇甫誕碑	千古の楷則	
		史事帖		
		温彦博碑		
		房彦謙碑		
	褚遂良(※)	枯樹賦孟法師碑	(※)初唐の三大家	芸術的な香気が高い
		五言帝京篇		
		哀冊文		
		雁塔聖教序		
	欧陽通			母から父の書法を教えられる
	薛稷	好古博雅		楷書、画にすぐれている
	孫過庭	草書千字文書譜	かなり思い切った文字の構成	張旭、懐素の草書時代の先駆者
唐中	張旭	郎宮右記		大酒飲み
	李北海	雲摩将軍李思君碑		得意の草書はほとんど真偽不明

偉大なる目的に進む人には、常に活力がある。

中唐	顔真卿	千福寺多宝塔碑 東方朔画賛碑 祭姪文稿 祭伯文稿 自書告身 争坐位帖 顔勤禮碑	書道興の功績あり 一碑一面貌
	懐素	自叙帖 聖母帖 草書千字文 蔵真帖 律公帖 苦筍帖	革新的書風 博学 奔放自由 文字に大小あり 筆に潤渇あり 妙味のつきないもの
中晩	柳公権	金剛船若経馮道碑 玄秘塔碑 神策軍紀聖徳碑 留沙碑、 魏公先廟碑 小字清浄経	
五代	楊凝式	韭花帖 神仙起居法	黄山谷、蘇東坡が著しく称揚 筆をふるわせて書く 書法
	李煜		
宋	蔡襄(※)	万安橋記 顔真卿自書告身跋 黄州寒食詩巻	顔真卿に学ぶ 蘭亭に学ぶ 東坡居士と号した
	蘇軾(※)	前赤壁賦 李白仙詩巻 寒食詩巻跋	号は山谷
	黄庭堅(※)	范滂伝 苕溪詩巻 蜀素帖	保守的な書を書いた あざなは元章
	米芾(※)	群玉堂米帖	

文化史上における大転換の時代

(※)宋の四大家

元	趙孟頫	蘭亭十三跋	あざな子昂
	鮮于枢	行書千字文	行書にすぐれていた
	趙孟堅	唐詩巻	草書を得意とした
		草書千字文	
		自書詩	あざなは子固
			孟頫の従兄
明	倪弁明	出師表書巻	
	文徴明	遊天池詩	
		重修蘭亭記	
	董其昌	仿顔真卿書	十七才で書に志す
			名声高き人
	張瑞図	赤壁賦	特異な書風であった
			ために嫌われていた
	倪元路	七絶行草幅	
	倪元路	題画詩	独特な気品をそえた書
	黄道周	孝経	画家として名声高い
	王鐸	草書詩巻	字形、切れ目に無頓着
		北方俚作	うねり、巻き込み独特
	傅山	瓊蕊盧帖	名声高き人、連綿体
		秋遊	王鐸よりうねり大
清	八大山人（朱）	臨河叙屏	書画に功績
	金農	文語軸	号は冬心
	劉石庵		行草に秀、濃墨尚書
	鄭石如	完白山人伝	篆、隷書の大家
	阮元	山左金石志	書論家、考証学大成
	包世臣	芸舟双楫	鄭石如の影響大
	呉譲之	呉譲之年譜	隷書にすぐれていた
	何紹基	臨張遷碑	金石の研究
	趙之謙	氾勝之書	書画刻に巧み
	潘存	楷法溯源	金石学研究
	楊守敬	水経注	潘存の高弟
	呉昌碩	缶盧印存	運筆の抑揚強く円形の
		苦鉄砕金	リズムをもって◎情性
中華民国			有、晩年になって声価
			が高まる。強固なる人

元		唐時代の影響大
明		行草体流行
		穏健で繊弱
		羲之風を堅守するも
		のと自己表現をする
		もとに分裂
清	金石学勃興	
	書道の復古主義起る	
	碑学派	
	鄭石如	
	呉譲之	
	趙之謙	
	帖学派	
	劉石庵	
	流紹基	
	篆書と篆刻、画に	
	秀	

中華民国	斉白石 羅振玉	流沙墜簡を編集	半文盲人美人画が特意

中国料理

瑞　光　園

福岡市西区梅林８番地
電話 863－9956

○営業時間／AM９：00～PM８：00
○定休日／月曜日、第３日曜日

はえう　ヘロサーヤヘ

福岡市西区友丘６丁目24－１（神学校バス停前）
ＴＥＬ（092）861－5892

先ず、自分をつくれ、自分を養え、人々の批判する前に。

第20代年間行事

七隈祭

昨年の十月三十日より十一月五日までの間開催され、十月三十日は、名物市中パレードに一年生・四年生主体で参加し、一日より我々書道部では例年通り一号館の五教室を使い各自連落と半折を一点づつ出品した。又バザーではうどん・だんご・肉まん・あんまん・ラムネ・みかんなど例年とは多少違った物を販売した。

クリスマスパーティー

昨年十二月十五日に我々二十代になって初めての行事を、天神東急プラザ三階「舞宇永」で行ない、OB六名を迎え、イントロ当てクイズ・アベック歌合戦、またこの日の為に練習されてきた先輩方の「ヨイショーズ」も加わり、パーティーをより一層盛り上げられた。

卒業生追い出しコンパ

五十五年二月九日に毎年ここで何かが起こると書道部の言い伝えとなっている「鳥まさ」で行なわれ、OB五名を迎え、四年生の労をねぎらう意味で開催された。在校生より卒業生へ記念品が、卒業生より部の方へ法帖が贈られた。

春季合宿

例年通り広島の国立江田島青年の家で二月十二日（火）～十六日（土）まで行なわれ、幸い天候にも恵まれ討論・古鷹山登山・カッター訓練全ての行程を無事終了することが出来た。

この合宿は言うまでもなく、討論中心にやっていく中で一年間の反省を行い、又理想論を踏まえての次期学年への方向性を話していくのが最大の目的であるが、一年生の反省があまりに抽象的で深さがない為に、理想・方向性がなかなか現実的に実感として、あらわれない面が多少なりともあったようだ。

新入生勧誘週間

四月十四日（月）より十九日（土）までの一週間新入生の勧誘を行なったが、あいにく前半は雨と風がひどくてあやぶまれたが、そこは我らが書道部、新入部員男十三名・女十二名の計二十五名

新入生歓迎コンパ

四月二十八日(月)天神「平和楼」に於いて、小西教授を始めとしOB諸氏十名を迎え新入生歓迎コンパを開催した。

新入生歓誘週間より一週間が過ぎ、一年生も大学生活又書道部にもおちつきをみせ始めた頃、大学生活初めてのコンパの雰囲気、酒の味で満喫した。

学術文化発表週間

六月二十三日（月）～二十八日（土）まで、学術文化系サークルの日頃の成果の発表とその連帯発展の一環として行なわれる。

書道部は一号館ロビーに於いてその展示を行なう。一年生は九成宮・蘭亭序の二つの古典を半紙に臨書、二年以上は半折作品一点を展示する。

常に誦虚であるなら、賞められた時にも、けなされた時にも間違いをしない。

福岡大学書道部創立二十周年記念パーティー

書道部も今年で創立二十年目を迎え、先輩諸氏のこれまでの労をねぎらい、又これを機会に過去の書道部の歴史を知り、今後の発展の糧として行く為の一つのふしめである。

六月十四日ガーデンハレスにて行なわれた。

夏季合宿

四泊五日間、全員参加で寝食を共に行なう練習中心の合宿である。書き込み重視ではあるが、時間厳守をはじめとする規律正しい生活スケジュールに従い行なわれる。

猛暑の中の練習ではあるが、その中で心身共に充実した日々となるよう、全員が努力していく。

県展合宿

県展を目指す者を対象とし、県展作品の養成の合宿である。

毎年学而会館で行なわれ、これまで数多くの先輩諸氏が県展入選の偉業が成された。

役員改選

現在二十代役員を中心に部を運営しているが、これからの書道部を運営していく次期役員を選出する。

西日本高等学校揮毫大会

西日本地域の高校生を対象に、高等学校の書道文化の普及と書技向上を目的として、毎年行なわれている。

本大会も今年で二十回目をむかえ、今年は十月十九日（日）に開催の予定である。

創立二十周年記念書道展

書道部も今年で二十年目をむかえ、それを記念して、現役とOBの合同展示会を開催する。十二月中旬に文化会館で行う予定である。

これを言うことは易く、これを行うことは難し。

書道部歴史

昭和三十四年
六月　同好会として書道部設立
発起人　新海蘇石
講　師　白水谷東先生

昭和三十五年
部長　田村豊教授
七月　諸隈郁智（当時経済学部二年）西部毎日展入選
十一月　三十六年四月を以って書道同好会・ペン習字同好会の合併により部昇格を認められる。

昭和三十六年
講師　柳田徴川先生
五月　福岡学生書道連盟結成
発起校　福岡大学書道部
十一月　第一回西日本高等学校揮毫大会開催

昭和三十七年
講師　赤木石掃先生
九文連参加

昭和三十八年
部長　古田龍夫教授
五月　九州学生書道連盟結成
発起校　福岡学生書道連盟

福岡県展入賞者
入選：野田良一　安河内克行

昭和三十九年
十一月　機関誌「荒鷲」創刊号発行
模範揮毫会開催

昭和四十年
十一月　第五回西日本高等学校揮毫大会（五周年記念大会）
三人展開催（書道、写真、美術）
県展入賞者
佳作：渡辺正道
入選：安河内克行　石橋健吾

昭和四十一年
第一回ＡＰＳ展開催（三人展より発展）
県展入賞者
県教育委員会賞：近藤敏則
入選：渡辺正道　船越達也

昭和四十二年
県展入賞者
佳作：原博之　葉玉幸俊
入選：近藤敏則　二村文夫　平井晴彦　納富扶沙子

忍耐は力以上のものを我らに授けん。

昭和四十三年　県展入賞者
入選：平井晴彦　前崎恒春

昭和四十四年　県展入賞者
県議会議長賞：尾中正
岩田屋賞：平井晴彦
福岡市教育委員長賞：森広子
新人賞：江川富登身
入選：安河内克行　船越達也　前崎恒春
福井義博　納富扶沙子
ペン習字部門と分離

昭和四十五年　第十回西日本高等学校揮毫大会（十周年記念大会）
県展入賞者
入選：高橋幸代　二村文夫　船越達也　松田正彰
江川富登身　高木正俊　納富扶沙子

昭和四十六年　県展入賞者
入選：安河内克行　平井晴彦　高橋幸代　前崎恒春
森広子　尾中正　高木正俊

昭和四十七年　県展入賞者
入選：安河内克行　二村文夫　平井晴彦　船越達也
森広子　納富扶沙子　三苫譲二　平田順子

昭和四十八年　県展入賞者
入選　高橋幸代　原博之　前崎恒春

昭和四十九年　県展入賞者
入選：荒尾記史朗

昭和五十年　第十五回西日本高等学校揮毫大会
（十五周年記念大会）
県展入賞者
朝日新聞社賞：前崎恒春
創立十五周年記念書道展開催

昭和五十二年　古田龍夫部長退官パーティー

昭和五十三年　県展入賞者
入選：結城健

虎穴に入らずんば、虎子を得ず。

福大書道部推薦の店

最高の輝きを求める

あなたへ

アイディアルダイヤモンド

宝石・貴金属・アクセサリー

イノウエジュエリー

天神コア 1F

福岡市中央区天神1丁目11番11号 PHONE (721)8273

○店長は、福岡大学出身です。
○５回～24回分割もできます。
○時計も有ります。

男の恋は男の一部である。女のそれは女の全生涯である。

焼　鳥
平　ちゃん
市内西区南片江バス停前
TEL 801－6312

家庭用品、建築金物、硝子器、陶器他
義　大穂金物店
福岡市西区友丘二丁目2－40
TEL　871－0251

福岡市西区片江1819－12
九州電気商会
田中　亨　　TEL（(871) 6370

六本松ハウジング
（事務所）福岡市中央区六本松二丁目6－8
〒810　TEL（092）711－8025

福岡市西区片江1123－1油山観光通り
喫茶ドルフィン
TEL863－5516

タバコ、日用品
長商店
倉瀬戸バス停前
TEL861－7455

けちん坊と豚は死んでからの方がうまい。

吉松砕石㈱

福岡市博多区立花寺497－1

TEL 092(503)8187

風は吹けよ。浪は荒れよ。希望は近づけり。

やき鳥安兵衛　堤店

福岡市西区堤四つ角
TEL 801－7888

福岡市中央区六本松4丁目11番32号

堤塗料店

TEL751－4043

仕出し料理
大小宴会場
割烹

大仙

TEL 721－9066

現金販売　安いよ！

Esso 宮元石油

堤サービス・ステーション

西区片江1129－2　油山観光道路

襖・表具・材料一式

株式会社 GSタカハシ

福岡市中央区天神3丁目10番10号
TEL (741) 3231(代)

短き人生は、時間の浪費によつて、一層短くなる。

メガネ
コンタクトレンズ
時　計
宝　石

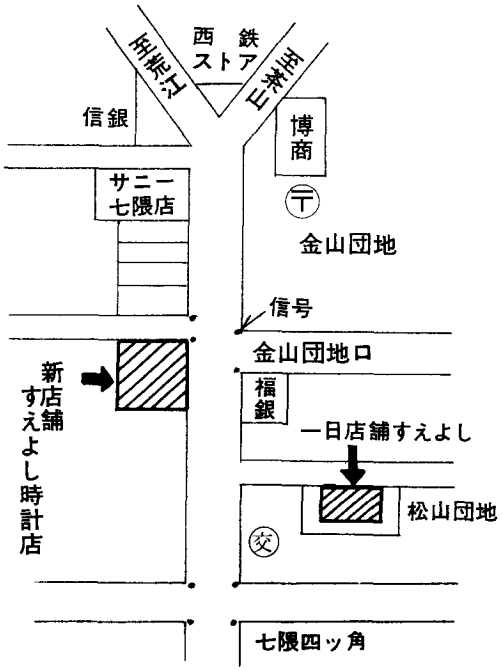
学割の店

日本眼鏡士・一級技能士の店

すえよし時計店

（店舗）　福岡市西区七隈４－３－１（サニー七隈店店横）
ＴＥＬ 092（801）0263
（自宅）　福岡市西区重留1140－13
ＴＥＬ 092（804）6216

どこよりも少しでも安く良い
品をと常に心がけております
御用命下さいませ
どんな時計の修理も
致します
お電話頂ければお伺い
致します



沈黙とは女にとつて最上の装飾である。

寿司、鉢盛、折詰、弁当、午後12時より午前3時迄営業

片江寿司

西区片江バス停前　TEL861－1181

Bike Road

西梅林バス停前　TEL 801－1748

友泉不動産

福岡市西区友丘2丁目4番28
電話　871－6[illegible]

男と女の店デス

理容
美容

パーマ…エッジガール…カット

ナカシマ

TEL（871）1325（理容）
（861）5171（美容）

茶山団地前バス停前 信号機角です

本格炭火焼

やきとり初陣

福岡市西区七隈4丁目（七隈四ッ角）
TEL871－0171

善を誇れば善を失い、能を誇れば能を失う。

石垣、ブロック
宅地造成、土木工事一式

大黒土木

福 岡市西区七隈265 －5
（七隈小学校前）
TEL（871）-6835

人生より友情を除かば、世界より太陽を除くにひとし。

コンパ、宴会、50名までＯＫ

焼とり
炉ばた焼　徳　川

福岡市西区長尾１丁目油山観光道路
ＴＥＬ871－0961

DIY・レコード・DPE、日用品、小物道具、書籍から家電、オーディオまで
サービス第一！
品ぞろえ第一！　奉仕に明けて奉仕に暮れる

デンキの寿屋　長尾店
友泉第２バス停より１分
10時▶ヨル7時　☎871－3903

趣味のきもの

呉服の池上

福岡市西区七隈４丁目４－４
ＴＥＬ　862－3535

割烹かどや

福岡市西区七隈３丁目西鉄ストアー駐車場前
ＴＥＬ862－1212

会席料理、活魚料理、季節料理
ろばた、鍋料理　１名様より100名様・大駐車場有り

有限会社　グリンレンタカー

福岡市中央区六本松３丁目８の５

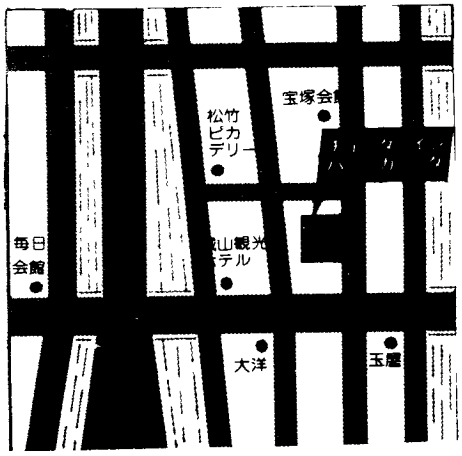
ＴＥＬ　（761）７３２５

友を信ぜよ、信じすぎるな。

ハッピーな夜を演出する

博多の夜を
満たしてくれる
イングランドの香り漂う
ハッピーなパブ

⊙コンパ、同窓会、合ハイの帰りに、又、歓送迎会、誕生日会、その他楽しい時、うれしい時に御利用ください。
⊙お一人様から300名様まで、ご予算に応じて承っております。



日本一ボトルキープの 安い店

東京第一ホテル 2F
PUB HOUSE
チューダーイン ハカタ
☎281・3311 内線744

酒のつくった友は、酔のさめると共に失う。

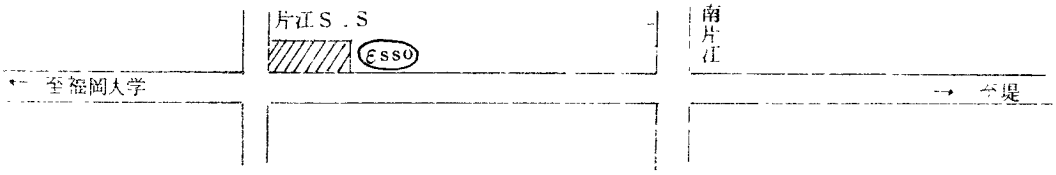
ふ　き　よ　せ

福岡市西区七隈４丁目５－６
ＴＥＬ 801－4988

喫　茶

魔　女　里　香

福大バス停前
ＴＥＬ 863－4240



朝日石油㈱片江Ｓ．Ｓ

ＴＥＬ (801) 0808
(862) 1030

Snackロンギー *Longy*

福岡市西区友泉亭２－３（ムーンライトビル１Ｆ）
ＴＥＬ７１２－５４６５

書き味に責任をもつ店うんぽうどう
書道用具専門店

雲　峰　堂

〒812福岡市博多区下川端町６－113
電話（代奏）281－1550番

君の仲間のことを私に語れ、されば、君がどんな人間か君に告げよう。

鳥　ま　さ

（春　吉　店）

うなぎ料理、牛しゃぶ鍋、牛すき焼、水たき定食

駐車場完備（25台収容）、営業時間 AM12：00～PM10：00

忘年会、新年宴会御予約承ります。

福岡市中央区春吉２丁目９－17

TEL ７３１－４８８２

７３１－４６３５

メガネ光学品専門店

信　岡　眼　鏡　店

TEL 801－2323

福岡市西区片江神松寺1695番地

神松寺交又点ヨリ油山へ50m（電気の寿長尾店前）

コーヒーと食事、コンパも出来ます

十　番　館

福岡市西区友丘２丁目２の45友泉第２バス停前

TEL　８６３－９８１１

酒のことなら **大庭酒店** 西区片江神松寺

TEL801－3333

日曜祭日休みなし、夜12時まで営業

学生寮、下宿、アパート……どこでも配達します。

○炉ばた焼のわらじや

コンパ会場あり20名様位第２バス停前

TEL871－6890

○炉ばた焼の赤とんがらし

５月オープン友泉ユニード横　TEL861－4825

男女間の友情はそれが本原的な感情である限り不可能です。

額・表装一式

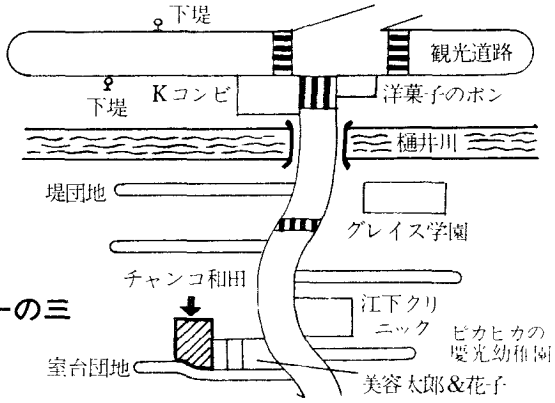
菊池映香堂

〒810 福岡市中央区 [illegible]
TEL (092) 741-0897

ちゃんこ和田

大小宴会できます
ちゃんこ鍋１人前900円

於 福岡市西区樋井川四丁目三十一の三
電話 092－862－1012



福岡市西区大字片江1560番地の１福大バス停前

福大前不動産

代表者 山北俊一郎
TEL 871－1530

写真はフォトアール

○証明写真
○クラブの集りの写真
○DPE
○白黒バッチリ　　梅光園１（白鳩保育園となり）

安くてうまい！

うどん・そば・丼もの

和久伊うどん

TEL 862－5849　友泉第２バス停前

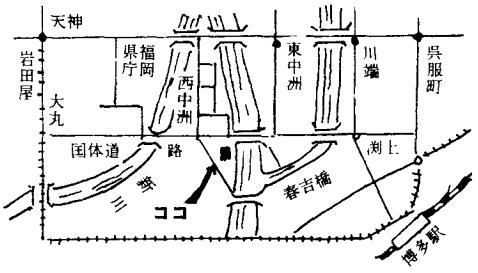
不満こそ人間の或いは、民族のための第一歩である。

平　助　筆

筆・墨・硯・紙・書道用品

中国書道用品・各種額縁表装一式

駐車場有り



復　古　堂　本　店

福岡市中央区春吉３丁目３街区９号
TEL　(761)5122・(761)0884

本場の味

皿うどん **長　崎　亭** チャンポン

福岡市西区七隈４丁目６－10
ＴＥＬ863－9927

学割致します!!

おしゃれのおてつだい

松栄クリーニング片江店

福岡市西区片江１２９９
TEL　862－1441

富貴には他人も集まり、貧賤すれば親戚も離る。

いいものをいつまでも……暮らしをエンジョイする時間・宝飾

天賞堂

天神コア
TEL 721-8436

1F　(721) 8449
B1　(721) 8448

今が決断の時
資格は生きがい
スペシャリストにあなたも!!

厚生大臣指定
福岡調理専修学校

～国家試験受けないで厚生省認可の調理師免許の取得

◇調理師養成科
・昼間部（修業1か年）男女共学
・夜間部（修業1か年半）年令制限なし

◇喫茶課　◇料理科

～申込先～福岡市中央区天神三丁目6－35学校法人福岡家政学園
TEL761－6155

うまさ、安さ、楽しさの店

やぶれかぶれ堤店

(20名様までコンパ等受賜ります)

炉ばた焼各種、焼とり、刺身類
鍋物、その他御注文に応じます。

堤四ツ角　TEL862－5957

勤勉と熟達があれば不可能な事は殆どない。

安くておいしい料理が食べられる店です　新しい仲間か出来る店です。　とにかく楽しいパブタイムを過ごせる店です。

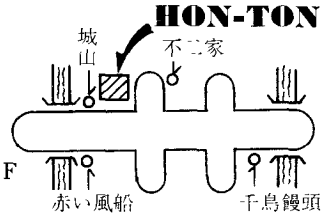
PUB＆RESTAURANT
HON-TON

MENU
- トーフのステーキ……450円
- ピザ……500円
- スパゲティ……500円
- アサリのワインむし…400円
- カニの甲あけ……600円
- コンビサラダ……500円

KEEP

	男性	女性
・スコッチウィスキーヘイグ…	4000円	3000円
・サントリーオールド……	4000円	3000円
・サントリーリザーブ……	5000円	4000円

〒810 福岡市博多区中州5－3－8鹿鳴春ビル2F
TEL (281) 3651内線25



不動産全般

六本松地所

福岡市中央区谷1丁目13－1
（六本松3丁目バス停前）
TEL 771－6859

友とは二つの肉体に宿れる一つの魂である。

友泉第二バス停横

守谷耳鼻咽喉科医院

福岡市西区友丘3丁目1－14
電話　863－1050

高級寝具、インテリア

かねやす布団店

福岡市西区七隈本町金山団地前
TEL 861－3359

MINI PUB

いれぶん

福岡市西区茶山5丁目17－6
TEL 861－4710

額縁・表装

萬年堂

福岡市西区鳥飼4丁目1－39
TEL 821－7767

総会結婚式場
和室．洋室宴会場
同窓会．コンパ．歓迎会

ご予算に応じて承ります
随時ご相談下さい。

中国料理 **平和楼**

本店　福岡市中央区天神2丁目6（新天町大通）　TEL 771－4141
大濠店　福岡市中央区大濠公園2区（西公園バス停前）TEL 761－7252

すべての場合を通じて、恋愛は忍耐である。

福岡大学書心会規約

第一章　総　則

第一条　本会は福岡大学書心会と称する

第二条　本会は事務室（本部）を福岡大学書道部内に置く。

第三条　本会は支部を置くことが出来る。

第二章　目的及び事業

第四条　本会は会員相互の親睦融和を図り、書道文化の普及向上に努めると共に福岡大学書道部活動の後援を行い、以って斯道に貢献する事を目的とする。

第五条　本会は前条目的達成の為次の事業を行う。

一、書道の振興に関する事業

一、書道に関する研究物、機関誌等の刊行

一、関係諸団体との親睦及び連絡提携

一、各種展覧会出品

一、其の他前条目的達成の為必要と認めた事業

第三章　組　織

第六条　本会正会員は福岡大学書道部員として登録をなし卒業をした者を以って構成する。但し原則として二年以上在籍したものとする。但し、強制するものではない。

第四章　役員及び機関

第七条　本会は目的達成の為次の機関を設置する。

一、役員総会

一、役員会

第八条　会員総会は本会の最高議決機関である。

第九条　会員総会は次項の場合、会長が随時これを招集する。

定例会員純会（年一回）

会長又は役員会の三分の一以上が討議する事項を提示し必要と認めた場合。

第十条　会員総会は会員の過半数以上の出席を以って成立する。

第十一条　総会の決議は出席会員の過半数以上の賛成を必要とし同数の場合は議長がこれを決定する。

総会出席に委任代理を認める。

第十二条　総会議長は書心会会長がこれにあたる。

第十三条　役員会は本会の執行機関である。

第十四条　本会役員は次の役員を置く。

会長（一名）、副会長（一名）、会計（一名）、

評議員（若干名）

以上役員の任期は二年間とする。

第十五条　本会事務所に事務室を置く。

事務室長を福岡大学書道部役員に委嘱する。

第十六条　役員会の決議は総会に準ずるものとする。

第十七条　会計年度は四月一日より始まり翌年三月三十一日に終る。

決断と忍耐とは、最も高貴な性質である。

第十八条　本会会費は正会員総会に於て決定する。

第十九条　会員の収支状況は総会、役員会に於て要求有り次第会計報告しなければならない。

第二十条　会計は毎年度の終りその年度の決算報告をしなければならない。

第二十一条　本会は福岡大学書道部の併置機関であり福岡大学書道部と提携し指導、賛成、賛助する。

第二十二条　本規約改正は総会に於て出席の会員の三分の二以上の賛成を必要とする。

第二十三条　本規約は昭和三十八年四月一日より施行する。

我々がだまされるのではない。我々が自分をだますのである。

福岡大学学術文化部会書道部

〈規　約〉

第一章　名称及び目的

第一条　本部は福岡大学学術文化部会書道部と称し、本学学生による書道愛好者の団体である。

第二条　本部は部員相互の親睦融和をはかり、人間形成を目指すと共に書道文化の普及、書技の向上を目的とする。

第三条　本部は前条目的を達成するために次の事業を行なう。

一、書道に関する事業

一、書道に関する調査並びに機関誌などの刊行

一、関係団体との親睦ならびに連絡提携

一、各種展示会出品

一、その他前条目的達成のため必要と認めた事業

第二章　組　織

第四条　本部は講師及び部長各一名を置く。

第五条　本部は幹事、副幹事、会計、企画、庶務、渉外、その他必要とする役職を置き、本部を代表する。

第六条　本部は次の機関を置く。

一、役　員　会

一、部　員　総　会

一、O・B会、但しO・B会規約は別に定める。

第三章　役　員　会

第七条　役員会とは、部の円滑なる運営を期するための機関である。

第八条　本会は原則として、第五条に基づく役員によって構成される。但し、第五条に基づく役員以外であっても幹事が認めた場合には、本会に出席することが出来るが議決権はないものとする。

第九条　本会は幹事によって召集され代表される。

第十条　本会は毎月一回開くことを原則とする。

第十一条　本会の議決は、部員総会の決定を妨げるものではない。

第四章　部　員　総　会

第十二条　本会は本部の最高議決機関である。

第十三条　本会は本部の部員によりこれを構成する。

第十四条　本会は必要に応じてこれを開き、幹事がこれを召集する。

第十五条　本会の議長は原則として、幹事がこれを兼務する。

第十六条

一、本部会は部員の過半数を以って成立する。

二、本部会の議決は出席者の過半数の賛成を必要とし、可否同数の場合、幹事がこれを決定する。

但し、出席者の過半数の賛成で重要事項とし、その決定には

真らしき嘘はつくとも、嘘らしき真を語るべからず。

出席者の三分の二以上の賛成を必要とする。

第十七条　本部会不成立の際、出席者の三分の二以上の賛成を以って仮議決することができる。但し、

一、仮議決については事後部員総会に於いて過半数の承認を必要とする。

一、重要事項は仮議決することはできない。

第五章　役　員

第十八条　役員構成は第五条に同じ。

第十九条　第三条につき、外部関係諸団体へ役員を派遣することができる。

第二十条　幹事は本部を代表し、副幹事は幹事を補佐し、幹事に支障ある時はその職務を代行する。

第二十一条　本部の役員改選は選挙制にし、これを重要事項と認め部員の無記名投票による選挙を行なう。

但し、委任状は認めるが、委任の方法は年度によって異っても良いものとする。

第二十二条　本部の役員の任期は四月一日より翌年三月三十一日までとする。

但し、役員改選後、翌年三月三十一日までは代行期間とし、その責任は新旧役員の連帯責任とする。

尚、欠員が生じた場合これを補充する。

第二十三条　役員改選は原則として十月に行なう。

第六章　役員の職務

第二十四条　役員の職務は次の通りである。

一、幹事は部務を処理し、部を統括する。

又、部の代表責任者であり、その責任を学術文化部会と部全体に負う。

一、副幹事は幹事を補佐し、幹事に支障ある時はその任務を代行する。又、福岡大学書道部OB会の事務を担当する。

一、会計は部費徴収並びに部費予算に関する収支の記録決算書を作成。

一、企画は第一章第二条に定められた本部の目的にそって諸活動を企画する。

一、庶務は本部の活動に必要な諸事務を行ない、資料の徴収保管をなし、機関誌の発行を行なう。

但し、機関誌の発行は年一回とする。

一、第五章第十九条に基づく役員は、本部関係諸団体との親睦融和を図り部の向上を目指す。

第七章　会　計

第二十五条　本部の会計年度は四月一日より翌年三月三十一日までとする。

第二十六条　本部の部費及びその他の所定納入金については、前年度末に部会に於いて決定しなければならない。

人知らずともわが良心これを知る。

第二十七条　会計報告は会計が行なう。又、部員の要求に応じて会計簿を公開し、年一回決算報告書を作成し、これを報告する。

第八章　部員の権利義務

第二十八条　本部の部員は次の権利を有する。

一、本部のあらゆる活動に参加し、人間形成の場として利用すること。

一、本部の部員総会に出席し、その議決に参加すること。

一、本部に於ける選挙権、被選挙権を有する。

一、本部の備品及び図書を利用すること。

第二十九条　本部の部員は次の義務を負う。

一、部員は部員総会に出席すること。

但し、やむなく欠席する者は事前に欠席届を幹事に提出しなければならない。

一、部員は部員その他の所定納入金を定期に納入すること。

一、本部の規約に従うこと。

第九章　入部・退部

第三十条　本部の入部は年度始め募集することを原則とし、学文会登録及び入部金納入を以って部員とする。

本部の退部は書面を以って幹事に願い出て、役員会の承認を得、部員に通達する。

但し、退部を希望する者は、その在籍期間までの所定の納入金を完納する。

第十章　罰　則

第三十二条　書道を研究する熱意なく本部の名誉を汚したる者、部活動を理由なくして一ヶ月以上怠った者。又、部の秩序を乱す者は部より除名する。

但し、欠席届提出者についてはこの限りではない。

第十一章　規約改正

第三十三条　本部規約改正の発議は部員総会に於いて部員の四分の一の同意により総会の議決を経て行なわれる。

尚、改正においては、本部員の三分の二以上の出席を必要とし、その出席者の三分の二以上の賛成を必要とする。

附　則

附　一　本規約は、昭和三十五年より実施、昭和四十五年四月一日改正。

美しい女にはやがて飽きがくる。善良な女には決して飽きない。